

大阪陣屋サミット

―陣屋の魅力と歴史的価値―

趣旨説明

本稿は、二〇一八年一〇月二七日に大阪大谷大学で開催した、歴史文化学科公開シンポジウムの要旨をまとめたものである。ここでは、本企画の趣旨について、あらかじめ説明しておきたい。

陣屋とは、城持ちではない大名や高禄の旗本などが設けた支配拠点のことである。規模が大きいものは、幕府が許容する範囲内で自ずと城郭風に仕上げる傾向にあるため、陣屋は城郭に類する施設といえる。したがって、地域を代表する文化財といっても過言ではないし、観光資源となる可能性も秘めている。

ところが現状では、文化財や遺跡としてはあまり認識されておらず、「周知の埋蔵文化財包蔵地」にすら入っていない場合もままみられる。そもそも本格的な研究の対象とはされないまま、城郭に付随して陣屋の事例も一部集められるという程度の扱いが長らく続いてきた⁽¹⁾。ようやく最近になって、房総における陣屋の事例集積や陣屋支配の実態分析などがみられるようになってきたが、陣屋の総数からみれば研究はまだ途についたばかりといえる⁽²⁾。こうした現状を踏まえ、本企画では、ひとまず本学

が所在する大阪府を対象に陣屋の歴史的価値を確認することで、その魅力を発信しようと企図した。

馬部隆弘・中西裕樹・田村正孝
吉井克信・尾谷雅彦・若林幸子

陣屋を研究するにあたって障害の一つとなっているのは、大名と旗本の別なくその支配拠点を陣屋と呼ぶように、規定が曖昧で極めて多様ということである。その要因は、幕府による陣屋の位置付けがそもそも曖昧であったことにも求めることができる。

宝暦十二年五月

新堀并石垣・土居等之儀ニ付御書付

一 無城之面々、居所有来之分修復申付候儀ハ相届ニ不及、新規堀を掘、或石垣・土居等築立候類之儀、其外不依何事、新規之儀ハ、伺之上普請可被申付候、

右之趣、無急度寄々可被相達候、

五月⁽³⁾

宝暦一二年（一七六二）に、幕府は初めて城主ではない大名の居所、すなわち陣屋に関する右のような規定を定めた⁽⁴⁾。これ以降、新たに堀・石垣・土塁などを築造する際には届出が必要となるが、原状復帰の場合はその必要がなかった。裏を返せば、これ以前は幕府に城郭と判断されない

表1 大阪府下の主な陣屋

| 類型 | 名称 | 所在 | 設置者 | 支配高 | 設置時期 |
|----|---------------|----------|----------|-------|-----------------|
| ① | 麻田陣屋 | 豊中市蛸池中町 | 摂津麻田藩青木氏 | 10019 | 元和元年(1615) |
| ① | 渚陣屋(永井伊賀守陣屋) | 枚方市御殿山町 | 河内渚藩永井氏 | 20000 | 万治元年(1658) |
| ① | 高安陣屋(牧野氏陣屋) | 八尾市高安町 | 河内高安藩牧野氏 | 27000 | 明暦2年(1656) |
| ① | 丹南陣屋 | 松原市丹南 | 河内丹南藩高木氏 | 10000 | 元和9年(1623) |
| ① | 狭山陣屋 | 大阪狭山市狭山 | 河内狭山藩北条氏 | 11000 | 元和2年(1616) |
| ① | 西代陣屋 | 河内長野市西代町 | 河内西代藩本多氏 | 10000 | 延宝7年(1679) |
| ① | 陶器陣屋(陶器藩陣屋) | 堺市中区陶器北 | 和泉陶器藩小出氏 | 10000 | ? |
| ① | 大井陣屋(渡辺氏陣屋) | 藤井寺市大井 | 和泉伯太藩渡辺氏 | 13500 | 寛文元年(1661) |
| ① | 大庭寺陣屋(渡辺藩陣屋) | 堺市南区大庭寺 | 〃 | 13500 | 元禄11年(1698) |
| ① | 伯太陣屋 | 和泉市伯太町 | 〃 | 13500 | 享保12年(1727) |
| ① | 吉見陣屋(吉見藩陣屋) | 田尻町吉見 | 和泉吉見藩遠藤氏 | 12000 | 明治3年(1870) |
| ② | 地黄陣屋 | 能勢町地黄 | 旗本能勢氏 | 3000 | 元和元年(1615) |
| ② | 高浜陣屋 | 吹田市高浜町 | 旗本竹中氏 | 1660 | ? |
| ② | 船橋陣屋(永井大之丞陣屋) | 枚方市船橋 | 旗本永井氏 | 3000 | 万治元年(1658) |
| ② | 長尾陣屋 | 枚方市長尾 | 旗本久貝氏 | 5780 | 元禄2年(1689) |
| ② | 上島陣屋 | 枚方市上島町 | 旗本水野氏 | 5700 | 元文元年(1736)カ |
| ② | 坂陣屋(水野陣屋) | 枚方市牧野阪 | 〃 | 5700 | 寛政年間(1794-1801) |
| ② | 南野陣屋(三好陣屋) | 四條畷市南野 | 旗本三好氏 | 2000 | 寛永年間(1624-1644) |
| ② | 四条陣屋(彦坂民之助陣屋) | 東大阪市四条町 | 旗本彦坂氏 | 1000 | 慶応元年(1865) |
| ② | 東山陣屋 | 河南町東山 | 旗本石川氏 | 3000 | 貞享2年(1685) |
| ② | 田園陣屋 | 堺市中区田園 | 旗本小出氏 | 5000 | 文政4年(1821) |
| ③ | 佐太陣屋(永井肥前守陣屋) | 守口市佐太中町 | 美濃加納藩永井氏 | 12000 | 宝永元年(1704) |
| ③ | 桜井谷陣屋 | 豊中市北緑丘 | 武蔵岡部藩安部氏 | 8000 | 寛永3年(1626) |
| ③ | 白木陣屋 | 河南町白木 | 常陸下館藩石川氏 | 10000 | 寛文元年(1661) |
| ③ | 平野陣屋(古河藩陣屋) | 平野区平野宮町 | 下総古河藩土井氏 | 12600 | ? |
| ③ | 伏尾陣屋(閑宿藩陣屋) | 堺市中区伏尾 | 下総閑宿藩久世氏 | 4800 | 享保8年(1723) |
| ⑤ | 淡輪陣屋(土浦藩陣屋) | 岬町淡輪大藪 | 常陸土浦藩土屋氏 | 8275 | 文久2年(1862) |

註1) 『日本城郭大系』第12巻(新人物往来社、1981年)に基づき作成。ここに挙げたものの以外にも陣屋は存在するが、網羅は他日を期したい。

註2) 類型は、①大名陣屋、②旗本陣屋、③大名出張陣屋、④代官陣屋、⑤海防陣屋、⑥重臣陣屋。

限り、無許可でどのような工事をしてもらったこととなる。原状復帰ですら許可が必要であった城郭とは、大きな違いがあるといつてよからう。

また、陣屋には城郭と同じく堀・石垣・土塁が伴うという認識を、右の史料からは読み取ることができる。つまり、この規定からは、城郭との構造上の明確な相違がわからないのである。よって、陣屋とは何かという問いに答えるためには、遺構の事例を集めて類型化したうえで、城郭との違いがどこにあるのかを明確にする必要がある。換言するならば、幕府が城郭ではないと許容する範囲を確認する作業が必要となってくる。そのため本企画では、遺構が比較的残っている陣屋を対象とした。

なお、先述の房総における事例では、陣屋を五類型に分けている。すなわち、無城大名の居所である①大名陣屋、高禄旗本の支配拠点である②旗本陣屋、大名の飛地支配の拠点となる③大名出張陣屋、幕府領の支配拠点となる④代官陣屋、そして⑤海防陣屋である。さらに鳥取藩などの大藩では、高禄家臣の居所である⑥重臣陣屋を構えることもある⁵⁾。大阪府下の主な陣屋は、表1に示したように類型①②の事例が多く、それに③が続く。類型②は遺構を確認できる事例が少ないことから、本企画ではまず類型③の白木陣屋と類型②の地黄陣屋をそれぞれ一例ずつ確認したうえで、成立順に類型①の麻田陣屋・狭山陣屋・西代陣屋・伯太陣屋を取り上げることと

した。

註

(1) 『日本城郭大系』第一巻／第一八巻（新人物往来社、一九七九年／一九八〇年）。

(2) 小高春雄・井上哲朗・大久保奈奈『研究紀要二八 房総における近世陣屋』（公益財団法人千葉県教育振興財団、二〇一三年）。齊藤紘子『畿内譜代藩の陣屋と藩領社会』（清文堂出版、二〇一八年）。

(3) 『徳川禁令考』前集四（創文社、一九五九年）三八三頁。

(4) 白峰旬「陣屋修築規定の実際の運用」〔同『日本近世城郭史の研究』校倉書房、一九九八年〕。

(5) 中村保「近世鳥取藩の陣屋町」〔『人文地理』二六巻四号、一九七四年〕。

（馬部 隆弘）

一 白木陣屋

1 白木陣屋の沿革

河内国石川郡白木村（大阪府南河内郡河南町）に所在する白木陣屋は、『大阪府全志』・『白木村誌』・『河南町誌』などで踏襲されてきた通説によると、石川総長が設置したとされる^①。総長は、下総佐倉藩主石川忠総の次男で、慶安四年（一六五一）に忠総遺領のうち一万石を継承し、伊勢神戸藩主となった。のち万治三年（一六六〇）に大坂城番に任じられるとともに、河内国石川・古市郡にて一万石を増加される。

通説では、白木陣屋の設置は寛文元年（一六六一）五月のこととされる

が、その根拠はおそらく同月付の「河内国石川郡・古市郡壱万石割郷村高帳」にあると思われる（『河南町誌』一三四頁）。この史料は、前年に新たに増加が決まった河内における年貢を総長に引き渡すよう、幕府の老中と勘定奉行らが連署して勘定所に命じたものである。つまり、総長による知行の開始を示すものではあるものの、陣屋設置の明証とはいえない。しかも、総長は同年一〇月に没してしまう。

総長の跡は、長男の総良が継承した。すると、寛文三年には白木池、同四年には中村新池、同一二年には白木西池と、白木村周辺で次々と溜池を普請する（『河南町誌』一九七頁）。したがって、このころまでに白木を拠点としたことは間違いなさそうである。

貞享二年（一六八五）に総長が没すると、その跡は長男の総茂が継承した。家督継承の翌年には、総茂の弟にあたる忠明に河内のうちで三〇〇〇石が分封され、東山陣屋（河南町）が設置された。よって、白木陣屋が管轄する石高は七〇〇〇石となる。総茂は、享保一七年（一七三二）に三〇〇〇石を増加されて常陸下館に移封となるも、翌年没した。なお、このときの増加に石川郡東坂村・甘南備村のうちの八四三石余が含まれるので、白木陣屋の管轄も若干拡がることとなる^②。以後、石川家の所領は変動なく幕末を迎える。

2 白木陣屋の人員体制

ここでは、比較的史料が残る幕末段階を対象に、白木陣屋の人員体制をみておきたい。

まずは、安政四年（一八五七）段階の下館藩士の分限帳にあたる「下館・江府・河内惣御家中席順帳」を整理した表2から確認する。これによると、

表2 下館藩の家臣団構成

| 職名 | 人数 | 禄高(扶持) | 河内駐在 |
|---------|----|------------------|---|
| 家老 | 1 | 500石 | 和田五郎大夫 |
| 年寄 | 3 | 70～230石 | |
| 用人 | 8 | 60～150石 | |
| 物頭 | 4 | 60～150石(13人) | |
| 取次上席 | 1 | (8両3人) | 雨森太郎朔 松尾左源太 (和田左盛) |
| 取次格 | 8 | 70～80石(10人～18人) | |
| 徒士頭格 | 22 | 60～150石(10人～14人) | |
| 給人席 | 19 | 50～250石(10人) | |
| 給人次席 | 5 | (8両3人～9両3人) | 雨森猪曾治 和田助作 松尾九左衛門 |
| 給人並 | 34 | (7両2歩3人～11両3人) | |
| 給人並無格人 | 3 | — | |
| 中小姓格 | 19 | (6両3人) | |
| 中小姓並 | 29 | (5両2歩3人) | 滝喜三太 小林弥八 |
| 中小姓末席 | 2 | — | |
| 中小姓並無格人 | 3 | — | |
| 医師 | 9 | (10人) | |
| 用達給人並取扱 | 1 | — | 北井彦次郎 滝直八郎 倉辻木一郎 倉辻友治郎 大谷亀輔 竹谷与三郎 小林利三郎 北村国蔵 上田幸之助 |
| 中小姓 | 7 | — | |
| 徒士取扱 | 3 | — | |
| 扶持医師 | 4 | (2人) | |
| 徒士目付 | 19 | (4両2歩2人) | 北井藤一郎 倉辻早太 |
| 徒士格 | 40 | — | |
| 徒士末席 | 2 | — | |
| 坊主 | 7 | — | |
| 勝手坊主 | 11 | — | 雨森氏が対応しようとしたところ、 勅命を蒙ってきた天誅組を「私宅」に 招くとは無礼だと立腹したため、雨森氏 は「役所」にて対応した。松尾氏が対応 しなかったのは、現地登用の藩士で、石 川郡甘南備村に自宅があったためである 『河南町誌』二五五頁)。一連の流れか ら、雨森氏の「私宅」は「役所」の近く に存在したことが判明する。 同じく文久三年一二月に陣屋の主立っ た者が連署して借銀した際には、概ね下 位から順に雨森猪曾治・松尾太左衛門・ 和田謹一郎・雨森甚左衛門・和田左盛・ 和田五郎太夫が名を連ねている(『白木 村誌』八頁)。また、前年の五月に下館 藩から白木陣屋に宛てた書面では、同様 に六名が宛所に連なっており、上位から 順に和田五郎太夫・雨森太郎朔・和田左 盛・和田助作・松尾九左衛門・雨森猪曾 治となっている(『河南町誌』三四六頁)。 |
| 小頭格 | 15 | — | |
| 普代組 | 46 | — | |
| 普代並 | 17 | — | |
| 定番 | 12 | — | |

註1) 「下館・江府・河内惣御家中席順表」(『下館市史』下館市史刊行会、1968年、767頁～777頁)による。

註2) 徒士頭格の和田左盛は「大坂」駐在。

註3) 白木陣屋絵図の長屋部分に苗字のみえる人物には下線を引いた。

河内に駐在している藩士は計一九名であった。表2からも読み取れるように、藩士当主の子息が家督継承まで給人並扱いとなることはあるものの、給人席以上が概ね知行取りで、それ以下とは明確な家格差があった。河内駐在のうち給人席以上に該当するのは、和田・雨森・松尾の三家である。文久三年(一八六三)八月に天誅組が白木陣屋を訪れた際には、「陣屋詰者当時三人」で、郷郡代役の「松井太左衛門」および「和田欣一郎」と

雨森甚左衛門で構成されていた³⁾。この騒動に対応して足軽頭である滝喜三太も使者として行動しているので、ここである「陣屋詰」とは白木陣屋に勤務しているという意味ではなく、より限定された意味で使用されていることになる。「陣屋詰」三人のうち、松尾氏は「休日ニ付自宅江引取居」、和田氏は江戸に出府しており、雨森氏は「居宅」にいた。そのため、雨森氏が対応しようとしたところ、勅命を蒙ってきた天誅組を「私宅」に

このうち和田五郎太夫途実は表2からも明らかなように陣屋詰の筆頭で、文久三年に謹一郎と通称を改める次男の助作途坦は同居しており、長男の左盛途恒は大坂蔵屋敷詰であった(『河南町誌』二三四頁)。表2の雨森太郎朔は猪曾治の父で、同じく文久三年に甚左衛門と名を改めている(『河南町誌』二五二頁)。よって、表2の松尾左源太と九左衛門も父子と考えられ、そのうち九左衛門が文久三年に太左衛門へと改称したこととなる。松尾氏は現地登用であることから地方支配に重きを置く人物で、出府などして藩中枢と連絡をとるのは主として江戸・下館から派遣された和田氏と雨森氏であった④。

明治四年(一八七二)に下館県が廃止されると、元藩士のうち七名が堺県の官吏となった。職位と人名を列挙すると、大属和田途恒・権大属和田途坦・小属松尾季光・権小属岡山正路・同尾花広信・一八等出仕大谷栄直・同小林元亮となる(『白木村誌』一八頁)。このうち、松尾氏や大庄屋として度々その名がみられる岡山氏・尾花氏は地元出身であるが⑤、江戸・下館から派遣された和田氏などが居残った事実、陣屋支配が在地と密着していたことを示唆していて興味深い。

以上のように、白木陣屋に勤務する一九名のうち、和田・雨森・松尾の三家が陣屋を主導的に運営していた。

3 白木陣屋の構造

白木陣屋は、明治五年(一八七二)に開校する郷学校に転用されるが(『河南町誌』四一五頁)、まもなく農地となる。そののち目立った開発をうけることがなかったため、建造物こそないものの、石垣は極めて良好に残されている。

また、明治四年に下館県が作成した絵図をトレースした図1-1も知られており、建造物も概ね復元することができる。しかも、最近になってその原図が新たに確認されたため、トレース図では不明であった色彩表現も補えるようになった⑥。このように、白木陣屋は往時の姿をかなり正確に復元できる貴重な事例といえる。

絵図は二舗で構成されており、南北方向の道を挟んで東側の絵図には「下館県出張所惣絵図」、西側の絵図には「下館県出張所陳屋外長家惣絵図」との表題が記される。つまり、西側は陣屋外で、長屋が設けられる区域であった。一方の東側には、道に面した中央の表門を入って正面奥に白洲なども付随する政庁があり、手前に三軒の家屋が並ぶ。すなわち、先述の「役所」および「陣屋詰」三人の「私宅」と数が一致するので、東側の敷地全体が厳密な意味での陣屋ということになる。三軒の家屋は南から順に少しずつ規模が小さくなっているもので、南から和田家、雨森家、松尾家となるのではなからうか。

西側の長屋には「滝居」のように居住者の苗字が記される。表2には、それに該当する人物に下線を引いている。これによると、東側に居宅がある三家以外の人物のうち、およそ半数が長屋を付与されていたこととなる。よって残りの半数は、松尾氏のように現地登用の可能性が高い。先述のように、下館藩士のうち七名は官吏として現地に残った。ところが明治五年の壬申戸籍をみると、陣屋周辺では白木村に八軒、南加納村に三軒、北加納村一軒と、その数を超える士族が確認できる(『白木村誌』五六頁)。これらのなかには、現地登用ののち堺県に配属されなかった者も含まれているのであろう。

次に、陣屋の軍事的な側面についてみておきたい。図1-2に示される

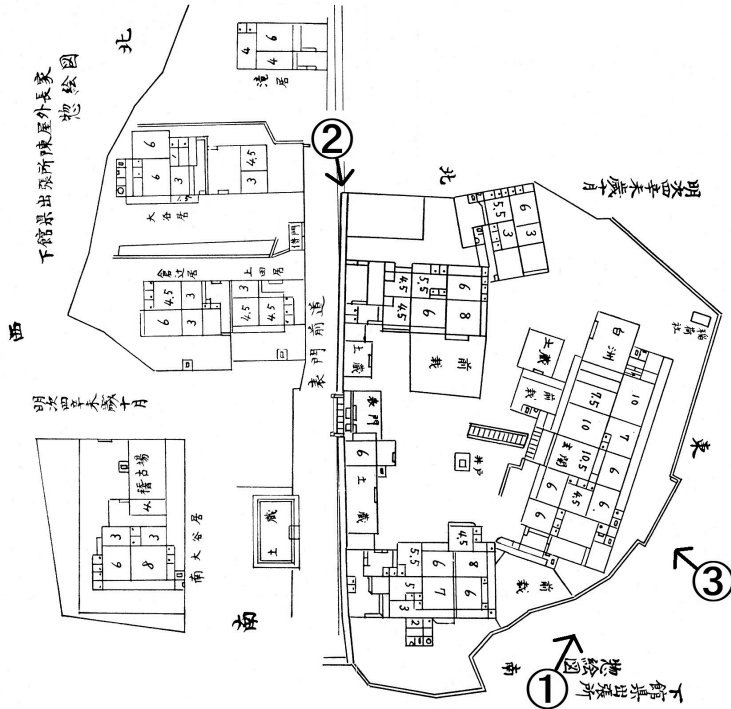


図1-1 白木陣屋絵図トレース図

『白木村誌』10頁・11頁より転載。2 舗の絵図を現地の地形に合わせて接合した。

ように、舌状台地に立地する白木陣屋の東側には馬谷川が、西側には深い谷を伴って小川が流れており、陣屋の北で二川は合流する。このように三方は急峻な自然地形で守られているものの、南側は白木村の集落と高低差なく繋がっている。陣屋外の長屋の一つである「南大谷居」はAの土地に該当するが、それと隣接する逆L字型をしたBの土地が白木神社の境内であることから、『白木村誌』四〇六頁、集落との遮断はほとんど意識さ

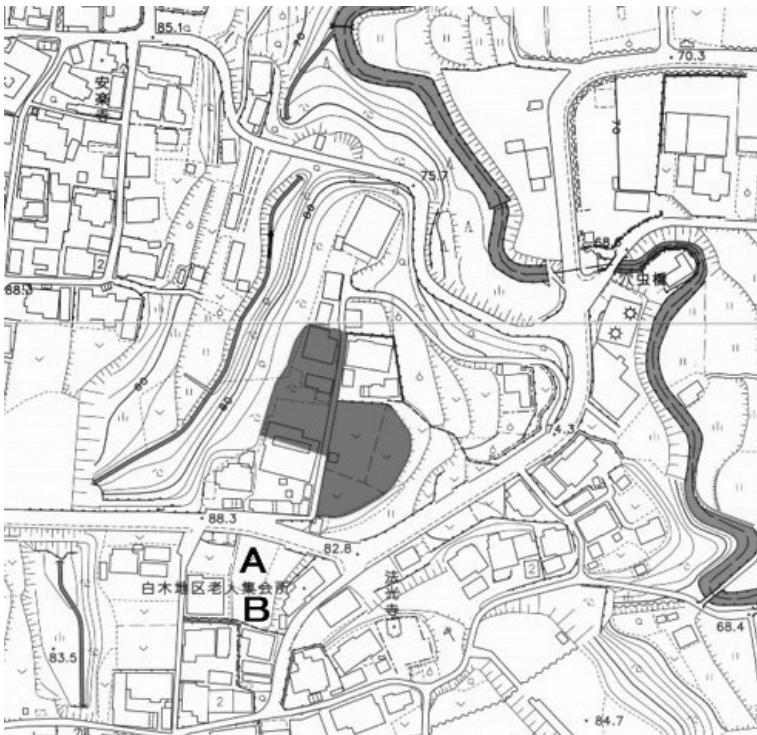


図1-2 白木陣屋周辺地形図

1:1000都市計画図をもとに作成。

れていないといえるだろう。石垣にも目を向けた。図1-3①のように、陣屋の南側から東側にかけては立派な石垣が残るが、②のようにそれ以外の箇所は区画のためのものに過ぎない。東側の石垣は、ちょうど「役所」の裏手にあたる部分に、象徴的な突出部を設けて横矢を掛けている。ところが、この突出部の北側は図1-3③のようになぜだかスロープ状となっており、上端の土塀には出入り口が設けられていた。

以上のように立地と石垣の両面で共通するのは、ある方向からみると軍事性は高いが、みる方向を変えると途端に軍事性が低くなるという点である。しかも、城郭ならば守りの要となるような部分を緩めているのは、意識的とすらいえる。こうしてみると、白木陣屋の縄張は本質的な軍事性を求めたものではなく、領民などに対して軍事性を見せることと城郭ではないと明示することを両立させたものと評価できるのではなからうか。

4 白木陣屋の機能

一般的にみて、大名出張陣屋の基本的業務は年貢徴収と江戸送金にある。このうち年貢徴収の実態については、酒井一氏の先駆的研究に詳しい^⑦。また、江戸送金のための借財の実態については、福島雅藏氏の分析がある^⑧。右の二点は、いずれの陣屋にも普遍的にみられる機能なので、先



図1-3 白木陣屋の石垣 上から順に図1-1の①・②・③(河南町教育委員会所蔵写真)

行研究に拠ることとし、ここでは白木陣屋の独自性を若干紹介しておきたい。

白木村に近い神山村の住民が、嘉永四年(一八五一)に荷物の運搬を請け負った際の請書に、「石川重之助様領分千早村^(能登主川総管)大坂近江町御蔵屋鋪迄、御産物水豆腐荷物担ひ」とみえる^⑨。管下の千早村で製造された特産品の水豆腐を運ぶ先が、大坂近江町にある下館藩の蔵屋敷なのである。白木陣屋主導による水豆腐の専売制については、文久元年(一八六一)の史料をもとに福島氏も触れており、隣接する狭山藩が安政五年(一八五八)に始めた制度を倣ったとするが^⑩、請書と併せると白木陣屋のほうが先んじて実施していたことが明らかになる。陣屋の役割は、このような点にも見出すことができる。

次に、有事に備えての軍事的機能についてみておく。文久三年に、天誅組は白木陣屋だけでなく、北条氏の狭山陣屋(大阪狭山市)、旗本戸河内守の津堂陣屋(藤井寺市)など、南河内の陣屋をまわって武具などの提供を要求した^⑪。このように武具を求めて大名出張陣屋・大名陣屋・旗本陣屋の別なくまわっていることは、それぞれが軍事施設として認識されていたことを示している。

以前分析したように、坂陣屋(枚方市)や長尾陣屋(同上)などの旗本

陣屋の場合は、江戸から派遣された代官と現地登用の代官が組み合わされて二、三人程度が陣屋に詰めていた⁽¹²⁾。その程度であっても、鳥羽・伏見の合戦の際には、新政府軍に武器と血判の提出を要求されていた⁽¹³⁾。このように小規模な旗本陣屋でも軍事施設として認識されていたことから、白木陣屋は少なくともそれ以上の軍事的機能は有していたであろう。

5 おわりに

最後に、白木陣屋と他陣屋を比較することで、府下における大名出張陣屋の共通点を確認したい。対象とするのは絵図が残されている下総古河藩の平野陣屋（大阪市平野区）である⁽¹⁴⁾。

まず立地は、既存の集落や神社に隣接している点が共通する。次に規模は、白木陣屋が一〇〇m×一〇〇m程度であるのに対し、平野陣屋は一五〇m×一〇〇m程度でほぼ同じである。さらに、白木陣屋は鬼門にあたる敷地の北東隅に稲荷社を設置しているが、平野陣屋も敷地内に稲荷社を設置している。ただし、東側が表門にあたるため北西隅に位置する。そして、白木陣屋は全周を防御しないという特徴があった。平野陣屋の場合は平地で高低差がないため、周囲を堀で囲うも、肝心の表門部分は水路程度の幅しかない。また、土塀も北面と東面のみで、南面と西面にはない。

以上のように、地形などの影響によって形態は大きく異なるが、構成要素を分解していくと、意外と多く共通点があることに気付かされる。

註

- (1) 井上正雄『大阪府全志』巻之四（大阪府全志発行所、一九三二年）一四七頁。
林総夫『白木村誌』（河南町教育委員会、一九五七年）三頁～一二頁。河南町

誌編纂委員会編『河南町誌』（河南町役場、一九六八年）二三三頁～二五七頁。以下、白木陣屋と石川氏の通説についてはこれらによる。

- (2) 福島雅蔵「常陸下館藩石川氏と河州飛地領」（同『近世畿内政治支配の諸相』和泉書院、二〇〇三年）表2。

- (3) 『会津藩庁記録』二、二六頁～一九頁。

- (4) 上牧健二「維新の動乱と下館藩」（『茨城史林』第三〇号、二〇〇六年）。

- (5) 前掲註（2）福島論文。

- (6) 馬部隆弘編『大阪大谷大学博物館報告書第六六冊 河南町の古文書』（大阪大谷大学博物館、二〇一九年）。

- (7) 酒井一「河内国石川家領の貢租」（同『日本の近世社会と大塩事件』和泉書院、二〇一七年、初出一九六〇年）。

- (8) 福島雅蔵「膳所藩・下館藩の河州飛地と天保上知令」（同『幕藩制の地域支配と在地構造』柏書房、一九八七年、初出一九七八年）。前掲註（2）福島論文。

- (9) 神山村文書（前掲註（6）報告書所収）。

- (10) 前掲註（2）福島論文。狭山藩の事例は、福島雅蔵「幕末期河内狭山藩の藩営専売と滝畑村水豆腐稼業」（前掲註（8）福島著書）。

- (11) 『会津藩庁記録』二、三六頁～三九頁。なお、同上一九頁では戸田河内守の津堂陣屋ではなく、戸田土佐守の小山陣屋とされる。

- (12) 蓮井岳史・馬部隆弘「旗本水野家の陣屋支配と坂村・岡田家・三浦家」（『三浦家文書の調査と研究』研究代表者村田路人、大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会、二〇〇七年）。

- (13) 『慶応事件記』（枚方市、一九七八年）三頁～八頁。

- (14) 『平野区誌』（平野区誌刊行委員会、二〇〇五年）一三五頁。

(馬部 隆弘)

二 地黄陣屋

1 はじめに

地黄陣屋は、大阪府豊能郡能勢町地黄に所在する旗本能勢氏の陣屋である。能勢氏は、平安時代以来の歴史を有する武家であり、戦国時代の末期には没落傾向にあったが、近代に至るまで同一地域を支配した畿内では珍しい存在である。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦後、徳川家康に属した能勢頼次が摂津国能勢郡（現在の豊能郡能勢町）に復帰し、大身の旗本として地黄陣屋を構えた。頼次は能勢氏中興の祖とされるが、戦国期の能勢氏との系譜などは詳らかではない部分も多い。しかし、いづれにしても、これ以降の能勢氏は多数の分家を輩出しながら、明治維新まで存続した。

地黄陣屋は、三面に高石垣が残り、端正な内枳形虎口が残る。無城主格の大名城陣屋にも全く見劣りしない見事な遺構であり、城郭愛好家の中では知られた存在である。

本章では、この地黄陣屋の歴史や立地・構造などをあらためて確認し、歴史的背景から陣屋造営について考えてみたい。

2 歴史

旗本能勢氏は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦後に能勢頼次が三〇〇石（能勢郡地黄村・上田尻村・下田尻村など計一二ヶ村）、その長男頼重一五〇〇石余（能勢郡倉垣村・吉野村・山内村）、次男頼隆一〇〇〇

石（丹波国桑田郡北之庄村・灰田村・由利村）、三男頼之八〇〇石（能勢郡切畑村）を拝領したことにはじまる。この他、能勢頼次は、周辺の村々六八〇〇石余を幕府から預かったという（「能勢家由来旧記書抜」）^①。

能勢郡は、多田（摂津）源氏発祥の地である多田荘（兵庫県川西市）という広大な荘園に近い。能勢氏は、この多田源氏の惣領家である源頼光から分かれた源氏である。鎌倉時代は在京する幕府御家人であり、室町時代にも將軍家の奉公衆として在京していた。惣領家は鎌倉時代以来、能勢郡の田尻荘（能勢町）など周辺地域を知行する一方、戦国時代になると庶流家が摂津守護細川京兆家被官として活動し、一時は能勢郡以外にも進出した。しかし、戦国時代も後半になると一族は没落した模様で、地元の軍記物以外での活動がうかがえなくなる^②。

さて、寛政三年（一七九二）の年紀を持つ「能勢家由来旧記書抜」には、地黄陣屋の造営に関する次の史料が収められている。

地黄村館築事

元和元年八月四日、大御所様駿府御還坐之刻、於伏見能勢伊予守御暇ヲ給リ、居館ノ構営ヲ成ス、去慶長七^{壬寅}年新ニ雖家城ヲ築、不殘不成就故、今年不殘出来シ、在家ヲ引、大手ニ町屋ヲカマヘ、山田勘兵衛承之奉行ス

町わりの事

一たれによらずやしき取候ハ、家立うらへ廿間口ハ家立候分はとらせ可申事

一両之間三間とも候ハ、余仁にとらせ可申事
一たれのかゝへにて候とも、家をよく立候ハ、のそミ次第可渡事
一寺と堺川きり可立事

一屋敷取候而も、家たてすに不可置候事

元和元年九月吉日

頼次^印

山田彦右衛門殿^参

元和元年（慶長二〇年。一六一五）九月以降、能勢頼次（伊予守。後に摂津守）が「館」の造営着手とともに町割りを行い、奉行である山田彦右衛門に指示を与えたというものである。但し書きには「此御書山田之家ニ今以伝之」と記される。

陣屋は、慶長七年に築造開始も未完であった「家城」の後継にあたり、元和元年中に「不残出来」と完成をみたという。また、大手に町立がなされたとあり、一つ書きの第一条にある「家立うらへ廿間」とは、町屋の敷地の奥行だと思われる。これは、大坂や江戸の町屋にもみられる敷地の大きさである。

第二条の「両之間三間」とは、おそらく道の両側に町屋が並ぶ両側町の間、つまり三間とは通りの幅ではないだろうか。第三条には、仕官先を問わずに町屋をのぞむ者には敷地を渡すこと、第五条には家を建てずに放置することのないようにとある。全体としては、町場の形成をうながす内容になっている。

現時点において、この「地黄村館築事」は、地黄陣屋の造営を示す唯一の史料となっている。実際の造営時期や期間については、さらなる検討を要するが、以下では元和元年九月以降に陣屋造営がはじまったものとして、ひとまず話を進めていく。陣屋の造営は、同年五月に終了した大坂の陣直後にはじまったことになる。

3 立地と構造

地黄陣屋が所在する摂津国能勢郡地黄（大阪府能勢町）は、丹波国に近い摂津国でも北の山間部にあたる（図2-1）。陣屋は、山あい的小盆地の東側斜面地に立地して、西側では能勢街道に近接している。江戸時代の能勢街道は、大坂から在郷町として栄える池田（大阪府池田市）を経由し、亀山（京都府亀岡市）方面へと至る主要な陸路であった。

なお、同じ小盆地内には、北西約二五〇mに丸山城跡（地黄古城・天王丸）が所在する。城主を能勢氏と伝え、これは歴史的な環境からも首肯できる。麓からの比高約三五mの尾根上に立地し、規模は南北一〇〇m強、東西一〇〇m弱である。土塁や横堀を駆使した構造であり、戦国時代でも後半の摂津地域の城館構造の特徴を持つ^③。

陣屋は、東西約七五m×南北約一〇〇mの規模で、単郭を基本とした構造である（図2-2）^④。北・西・南面に石垣を構築し、特に南面石垣は現存高が四m以上ある。西面の能勢街道と町屋の方向に向けて、内枳形虎口を設けている。こちらが陣屋の正面（大手）にあたる。ただし、枳形内部は、ほぼ通路の幅しかない。

陣屋跡には、能勢町立東中学校（現在は廃校）が建設され、現状の地表面観察では東側の旧状がよくわからない。ただし、古川与志継氏による「地黄陣屋周辺要図」（図2-3）によれば、東側の斜面続きを土塁と堀切で遮断していた可能性が高い。しかし、軍事的弱点となる周辺地形の高所を遮断するという意識は、石垣構築部分の土木量を鑑みた場合、弱いという印象を受ける。

地黄陣屋には、阪部家蔵「地黄陣屋遠景図」という外観を描いた絵画資料が存在した（図2-4）。現在は所在不明とされており、年代等の詳し

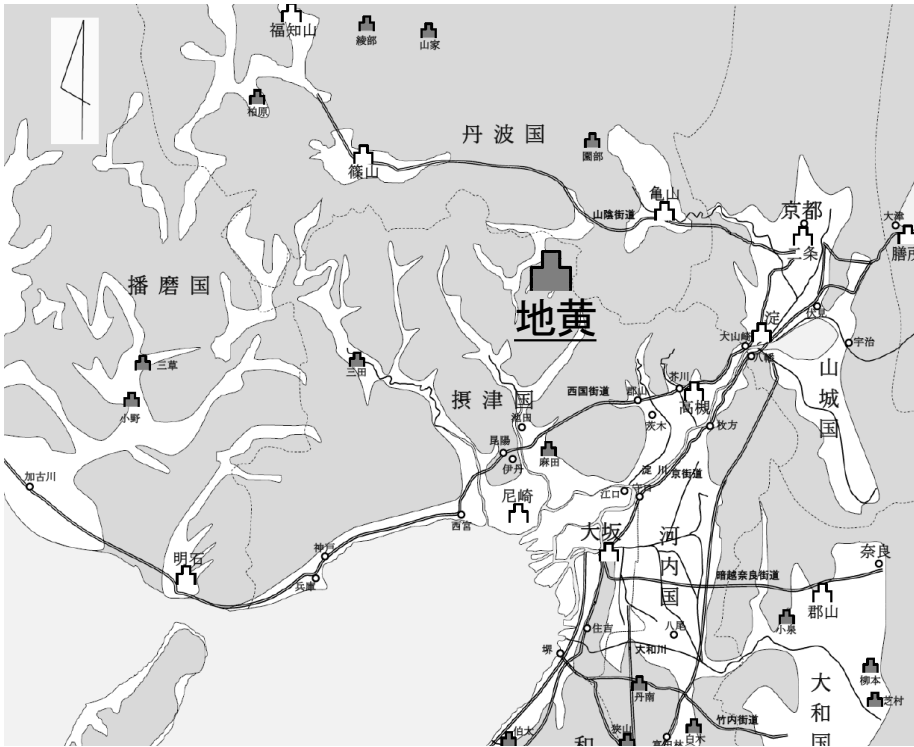


図 2-1 地黄陣屋の位置

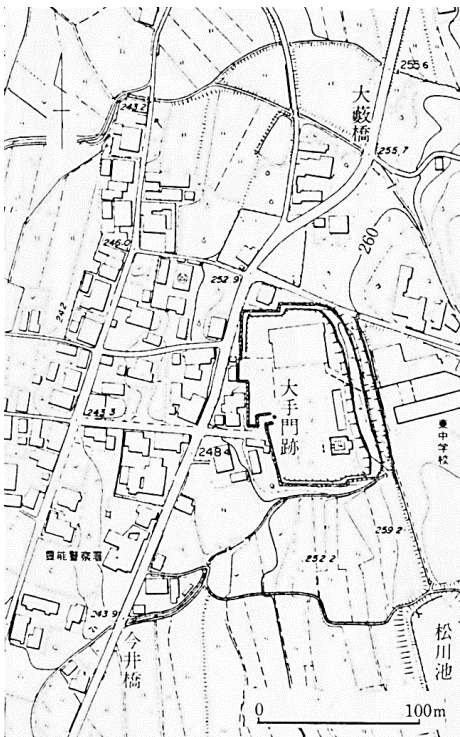


図 2-3 地黄陣屋周辺要図（註5）

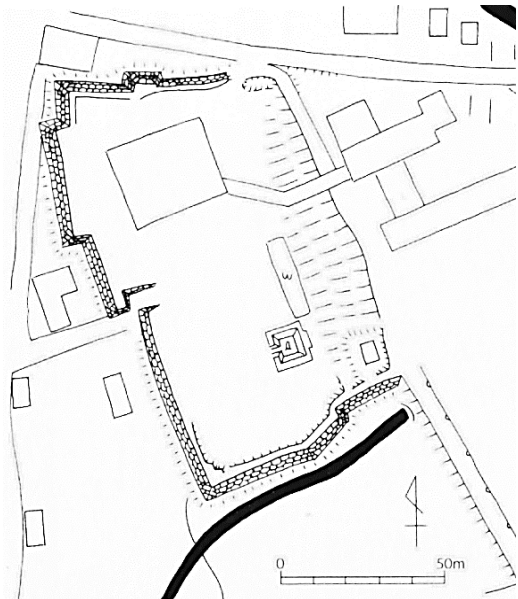


図 2-2 地黄陣屋概要図（註3）

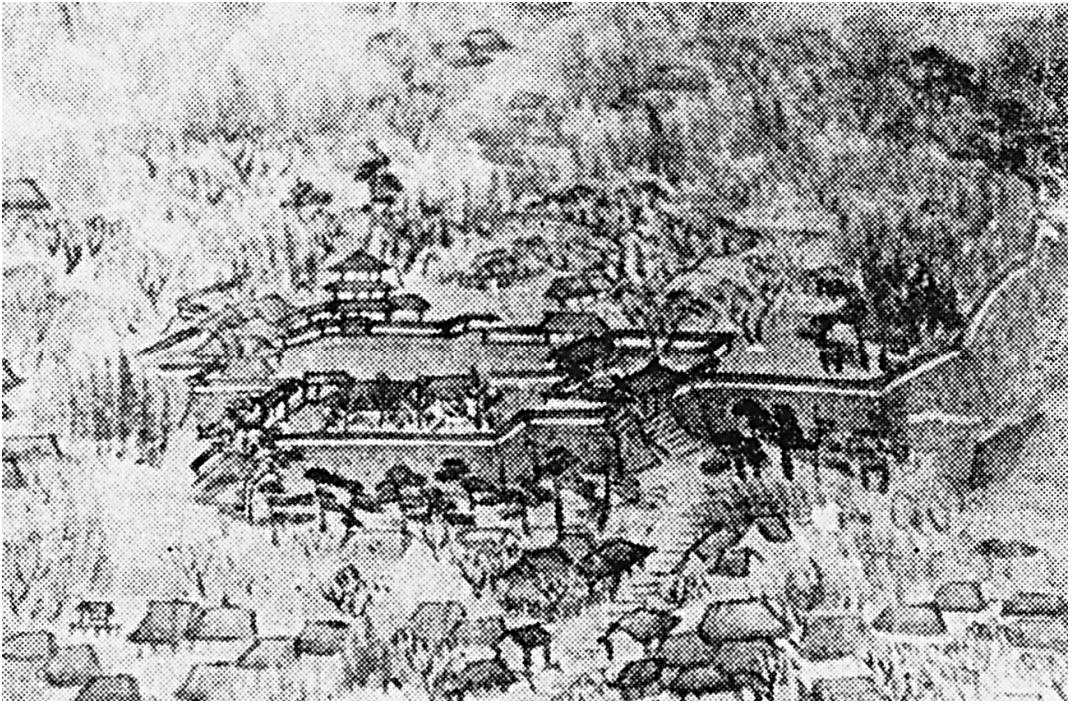


図2—4 地黄陣屋遠景図（阪部家蔵）

いことは不明である。けれども、『日本城郭大系』に所収された範囲をみると、石垣のラインなど陣屋の構造は現状の遺構と一致するところが多い。内部は区画されており、北東部に三階櫓相当の楼閣のような建築が存在していたようだ^⑤。

続いて、地黄の町場部分に目を転じたい（図2—5）。陣屋前面に並行

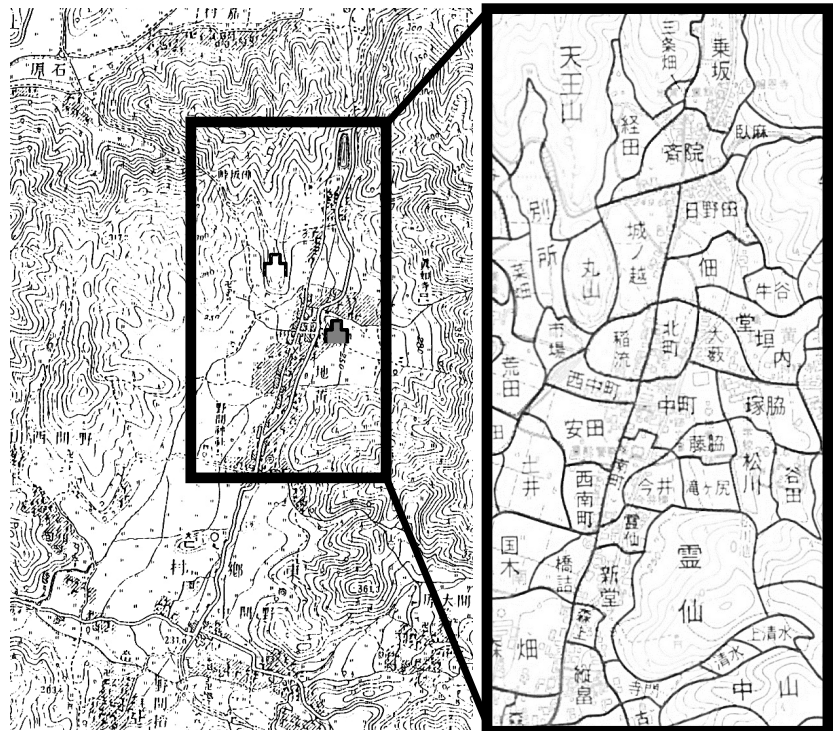


図2—5 地黄周辺（大正12年「妙見山」部分）と小字図（『能勢町史』第1巻）

する南北道と南北方向の能勢街道との間には「北町」「中町」「南町」、能勢街道西側に「西中町」「西南町」という町地名が小字から確認できる。

この二本の道は、陣屋正面の枅形から伸びる東西方向の直線道と交差し、付近は街区を形成していたと思われる。ただし、能勢街道は陣屋付近で直線となるものの、全体的に湾曲する部分が多い。

また、陣屋と街道の方位は一致するものではなく、正対する関係とは言い難い。町場には堀などの圍繞施設が存在していない模様で、町場の出入口に枅形や屈曲など遮蔽施設は確認できない。なお、家臣団屋敷地などの実態解明については、今後の課題である。

まとめておくと、地黄陣屋は、大阪府下における稀有な高石垣と枅形を備えた近世武家の居館遺構である。これに付属する町は、既存の主要陸路（能勢街道）を利用したもので、全体的に陣屋と一体性、規格性を持たせるような計画的な工事が行われた形跡に乏しい。摂津・丹波を結ぶ街道を前提とする「陣屋町」が成立したが、近世武家の居館の存在が突出していると評価できるだろう。石垣の本格的使用と内枅形虎口が象徴するように、この点が地黄陣屋の特徴である。

4 歴史的背景

続いて、陣屋が造営される前後の能勢地域の歴史的背景を確認し、地黄陣屋の特徴を考える視点としたい。豊臣期の能勢郡には、九州の大名である島津氏の在京賄領約五千石が設定されていた。一方で、能勢氏は豊臣家に仕えると思われるものの、不明な点が多い。

元和元年（一六一五）の大坂夏の陣では、能勢周辺で「多田之庄一揆」が蜂起し、能勢頼次は徳川將軍家から「退治」を命じられた。その際は、

龜山城主の岡部長盛（三万二千石）と篠山城主の松平康重（五万石）という丹波に拠点を置く徳川氏の譜代家臣とともに鎮圧へと向かった。この功によって、頼次は二千三百石の加増を受けたという（『譜牒余録』）。

能勢郡周辺には、摂津源氏の根拠（多田荘）を掌握する目的で、鎌倉幕府の北条得宗家が多田院御家人という制度を設けていた。摂津源氏の祖源満仲を祀る多田院（兵庫県川西市）への奉仕を役とする御家人であり、一般御家人とは異なって村落の有力者をも含む。地域の身分としては近代に至るまで残り、戦国時代には村の土豪が中心であった。多田之庄一揆とは、能勢周辺の村落が豊臣方に与した動きではないだろうか。

「松井（川越）家譜」によれば、松平康重は摂津の「曾根一揆」も鎮圧したといい、後に「摂州堺、丹波国野瀬ニ兵ヲ出シテ、大坂ノ落人ヲ捕縛ス」ともある。曾根という地名は、現在の大阪府豊中市に存在し、近世以前には榎坂郷に属する小曾根という村が所在した^①。「丹波国野瀬」とは、能勢郡のことだろう。ただし、能勢地域と比較した場合、小曾根という一村落の一揆を並列することには違和感がある。わざわざ、城主級の武将である松平康重が鎮圧に向う背景も考えづらい。

「ソネ」という読みに注目すると、およそ能勢郡の西半分には多田源氏ゆかりの枳根（キネ）荘という荘園が所在した。室町時代には、多田院の支配下にあった荘園である。中世には「枳根荘人々中」とされる集団があり、戦国時代には村の土豪や侍層による集団も形成されている（西郷諸侍中）。曾根一揆とは、能勢郡における反徳川の一揆ではないか。

「能勢家由来旧記書拔」には、「従去年当年之春迄之間、領分大坂江奉公ニ罷出候者於在之者、任交名可被成言上候、今度在所江罷歸り候者可有之候条、然者可被捕置候」と徳川家年寄の土井利勝と酒井忠世が能勢頼

次に命じた連署状も収められている。能勢家の領内では、豊臣家に奉公した者が多かったのだろう。その人名の報告が求められ、在所に帰った場合には捕らえるようにとある。

また、「能勢家由来旧記書拔」には、能勢一族の能勢伊織という人物が登場する。伊織は豊臣秀頼に仕えて、大坂の陣では後藤又兵衛に付属した。大坂落城後は、地黄の東に隣接する丹波国犬甘野（京都府亀岡市）の長沢与三とともに丹波へと落ちた。長（中）沢氏は、室町幕府奉行人に連なる土豪で、かつては一族が明智光秀にも仕えた。その後、伊織は能勢郡に戻ることは叶わず、丹波で別家を継いだという。

元和元年の大坂夏の陣の際、亀山城主岡部長盛と篠山城主松平康重は山陰道の掌握するため、ともに亀山城（京都府亀岡市）に在城している。亀山城と篠山城（兵庫県篠山市）は、天下普請で築城（修築）された対豊臣氏への軍事拠点である。大坂の陣の際、摂津・丹波国境の能勢郡周辺では、豊臣方に与する地域社会の動きがあった。

また、同年五月の豊臣家滅亡後、徳川幕府は翌六月に松平忠明を一〇万石で大坂城、閏六月には内藤信正を四万五千石で高槻城（大阪府高槻市）、七月には水野勝成を六万石で郡山城（奈良県大和郡山市）に配置する。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦以降、高槻周辺では地方支配を徳川家代官が執り行い、郡山周辺には徳川家臣の国奉行（大久保長安）が関与していた。

両城は、亀岡・篠山のように築城や武将の配置を伴わないが、地域支配という上では、徳川方の対豊臣の最前線であった。大坂の陣後の城主配置は、豊臣家の影響が残る上方を当面、軍事的に確保する狙いがあったものと思われる⁷⁾。

陣の最中には、大坂城に近い摂津国中島（大阪府淀川区など）の村々が豊臣方と徳川方と分裂する動きを示している。陣後も、地域社会の動揺は継続していたとみるべきだろう。

この後、徳川幕府は自らが定めた「一国一城令」「武家諸法度」とは関係無く、新規の築城を大坂周辺の畿内近国で実施し、譜代の家臣を配置していく。元和三年には二万石で土岐定義を配して摂津国で高槻城の公儀修築を行い、元和四年に五万石で戸田氏鉄を配置した同じく摂津国での尼崎城（兵庫県尼崎市）の築城、元和五年には一〇万石で小笠原忠真を配した播磨国の明石城（兵庫県明石市）築城といった具合である。

ただし、寛永一〇年（一六三三）以前の大名とは、規定によれば五万石以上であり⁸⁾、後年のように一万石ではなかった。このため、元和三年の公儀修築による当初の高槻城は、大名の居城には該当しない⁹⁾。当時、城郭の主は、必ずしも大名である必要はなかった。

城郭については、大坂の陣から間もなく発布された武家諸法度に修補規定がある。一方、陣屋の修補規定については、宝暦一二年（一七六二）と时期的にかなり遅れる¹⁰⁾。これは、陣屋という施設がかなりルーズな存在であったことを示すのではないか。

反面で、元和五年に但馬国の出石城（兵庫県豊岡市）から丹波国園部（京都府南丹市）に移された小出吉英（二万石）による館造営では、幕府が二重堀、狭間のある堀を認める一方、櫓は不可とされた（園部陣屋）。陣屋にも幕府の統制が及ぶも、作事（建築）よりも普請（土木）に関しては緩いような印象を抱かせる。ただし、園部陣屋では全面的な石垣の採用がなされない¹¹⁾。石材産地も考慮せねばならないが、本格的な高石垣と内枘形虎口、三重櫓のような建築を備えた地黄陣屋の特異さがみえてくる

ようにも思う。

5 まとめ

現時点において、地黄陣屋は、元和元年（一六一五）の大坂の陣直後に造営が本格化した可能性が想定される。町場を伴い、その立地は摂津・丹波を結ぶ能勢街道を意識したものといえるが、町場形成よりも陣屋本体である武家居館の存在が際立つものであった。その象徴が高石垣・枘形・三階櫓相当の建築である。

造営戦後の周辺地域の歴史的背景をうかがうと、豊臣方との距離が近い村落を含む地域社会があった。大坂の陣後、徳川幕府は畿内近国を軍事的に掌握するために築城を立て続けに実施した。それは大名の居城に限らず、高槻城のような大名未満の武将の城郭を含む。

地黄陣屋は、徳川幕府による造営ではない。しかし、このような世相を受け、広い意味では徳川氏による対豊臣（上方）の軍事動向・地域掌握の中で成立した「城郭」に近い存在ではなかったか。

地黄陣屋に関しては、史料による検討が不十分であり、このような指摘も再考の余地がある。一方で、陣屋の個別事例が集積されることで、その特徴も明らかになるだろう。今後の研究に期したい。

註

（1）特に断りのない限り、引用の資料は能勢町史編纂委員会『能勢町史』第三巻 資料編（一九七五年）に所収のものである。また、能勢町域の歴史については、同編纂委員会『能勢町史』第一巻本文編（二〇〇一年）を参照した。

（2）戦国時代の能勢氏については、前掲註（1）の『能勢町史』第一巻本文編の

他、村井祐樹・末柄豊編『真如寺所蔵 能勢家文書』（東京大学史料編纂所研究成果報告、二〇一〇年）を参照願いたい。

（3）中西裕樹「丸山城・地黄陣屋」（同『大阪府中世城館事典』戎光祥出版、二〇一五年）。

（4）前掲註（3）では、上下二段の曲輪と評価したが修正したい。

（5）古川与志継「地黄陣屋」（『日本城郭大系』第二二巻、新人物往来社、一九八一年）。

（6）乾宏巳「小曾根村」（『大阪府の地名Ⅰ 日本歴史地名大系28』平凡社、一九八六年）。

（7）中西裕樹「元和三年公役普請（築城）の高槻城の評価―城郭の機能・性格・構造から―」（高槻市立しろあと歴史館『天下泰平と高槻城』二〇一七年）。

（8）藤井譲治『日本の歴史12江戸開幕』（集英社、一九九二年）。

（9）前掲註（7）。

（10）白峰旬『日本近世城郭史の研究』（校倉書房、一九九八年）。

（11）中西裕樹「園部陣屋から園部城へ―明治維新の築城とその平面構造―」（仮称城館学会『城館研究論集』発刊準備号、二〇〇一年）。

（中西 裕樹）

三 麻田陣屋

1 はじめに

大坂城にほど近い現豊中市域には、いくつも陣屋が置かれていた。武蔵国岡部藩安部氏（譜代）の桜井谷陣屋、上総国飯野藩保科氏（譜代）の浜屋敷、大嶋雲八系（旗本）の牛立陣屋、蒔田氏（旗本）の熊野田陣屋が確

認できる。そして麻田陣屋には、外様大名のなかでも大坂城の最も近くに配置された青木氏が、一四代二五七年にわたり拠点を置いた。本章では、陣屋図と発掘成果から麻田陣屋の特色を論じていく。

2 麻田陣屋の地理的位置

麻田藩青木氏領は、摂津国豊嶋・川辺郡、備中国浅口・小田・後月郡に散在した。そのなかで麻田陣屋は青木領の南端に立地し、現在の阪急宝塚本線・大阪モノレール蛍池駅のすぐ西側に存在した。

麻田が拠点に選ばれたのは、陣屋の北約1kmの地で西国街道と池田道（能勢街道）が交差し交通の要地に近接していたことや、大都市大坂や在郷町となる池田を意識してのことだろう。また、麻田村は中世以来の村で、一九世紀の「天保郷帳」では高七〇〇石余、「旧高田領取調帳」では高約一二〇〇石を記録する藩領随一の大村であった。さらに、麻田は地形面から陣屋に適していた。千里丘陵の南西端に位置し、陣屋の西辺と南辺は約一〇mの段丘崖、そして南に下った地には御神山、東には天王山が立っていた。

このように、麻田陣屋は領内において、軍事・交通・経済の要衝として、最適な場所に設置されたといえるだろう。

3 麻田陣屋の建設時期

初代藩主となる青木一重は、美濃国青木村出身といわれ、はじめ駿河国今川氏真に仕官した^①。今川氏滅亡後は、徳川家康、丹羽長秀の家臣となり、天正十一年（一五八三）からは羽柴（豊臣）秀吉に仕えるようになった。「青木伝記」（東京大学史料編纂所謄写本）によれば、はじめ伊予国周

布郡に所領を与えられたというが、同一三年の摂津中川氏の播磨移封に伴い、青木領の領知替があり、摂津豊嶋郡と伊予国周布郡、備中国浅口・小田・後月郡内に一万石の所領を得た。

豊臣時代の一重は大坂谷町に屋敷を構えた。そして、摂津国では家臣の江原氏が麻田近くの堂池前を拠点に所領管理した。江原氏は箕面川より江原井を引いたり、文禄四年（一五九五）に山所池、慶長七年（一六〇二）にさら池、同一三年に井田（飯田）池を建設したりと（増補御領地雑事記乾^②、森本家文書）、麻田村周辺の灌漑整備をした。これらのため池は、後に建設される陣屋の防御性を高める役割も担った。

一重は関ヶ原合戦後も豊臣秀頼の馬廻七手組の組頭として活躍し（青木民部少輔組高付^③、東大史料編纂所謄写本）、慶長十九年の大坂冬の陣では甥正重とともに奮戦した。両軍和睦後、一重は秀頼の謝礼使として駿府の徳川家康のもとに赴いたが、京都まで戻ったところで拘禁され、夏の陣への参戦は叶わなかった。

元和元年（一六一五）七月、一重は家康に帰順し、一万二千石の所領を安堵された。その後麻田藩領は、同三年に二千石を弟の旗本青木可直に分与するなど三度の変遷を経て、寛文二年（一六六二）に一万一千九百石で確定した。

では、麻田陣屋はいつ建設されたのか。祝正治が一重のために土地を献上し、濠池を廻らし方形であったという伝えもある^④。これがどの時期かは不明だが、陣屋建設は元和元年以降であろう。「青木伝記」には、

大坂落城後一重君参府在着之砌信実宅^⑤ニ御料理被召上、御供之面々迄支宅^⑥、新右衛門方^⑦ニ仕例ニ成て、一重君御一代如斯也、其麻田家中屋布地割有之節、惣並^⑧新右衛門へも御屋布地被下、自分屋敷合大屋

布之由、十郎兵衛正親江戸引越^二付自分屋し敷地は御上^江差上之^一とあり、大坂落城後に「惣地割」が行われたとある。この惣地割が陣屋建設を指すと考えられる。発掘調査では一七世紀中葉以降の遺物が出土しているが^④、おそらく一重の晩年から寛永五年（一六二八）に第二代藩主となった重兼時代の初頭に建設されたであろう。一七世紀後半には、重兼は、旅泊軒（下屋敷）や、摂津にて佛日寺（はじめ松隣寺）・方広寺、江戸にて瑞聖寺といった菩提寺を建設し、藩主関連施設を整備した。

4 絵図からみる麻田陣屋

ここからは、麻田陣屋図を通して、陣屋の構造を検討する。

まず、伝来する麻田陣屋図を確認しておこう。陣屋図は、一九世紀の様子を描いたものが数点ある。「摂州麻田御陣屋図」（豊中市教育委員会所蔵 青木一長氏寄贈資料、以下「市教委図」と略す）は、青木分家に伝わったもので、一九世紀前半頃の状況を描いたと考えられている^⑤。家老中村家の「麻田陣屋図」（以下、「中村図」と略す）は、明治半ば以降に製作されたが、在りし日の陣屋を懐古して明治初頭の状態を描いている。また、小谷洋氏旧蔵の麻田陣屋図（昭和八年（一九〇三）写「青木藩士邸内地明治六年現状」、以下「小谷図」と略す）は、明治六年（一八七三）の現状を記したものである^⑥。他に、森本家文書にも明治前半の麻田陣屋図が二点存在する（以下「森本図」と略す）^⑦。

では、市教委図をもとに陣屋の構造をみていこう。図3は、市教委図をトレースしたものである。

陣屋の形は、北を上とすると逆し字型となる。上田一氏は陣屋南西の麻田村集落と合わせると方形となるプランと指摘するが、集落の所在を表す

とみられる小字「西ノ町」「南ノ町」は段丘の上下に及び、方形ということではできない^⑧。

陣屋の内部は、御殿など陣屋の枢要部を北・東・南の三方を囲むように家臣の屋敷を配置する。市教委図には邸宅名が書かれた貼紙があるが、左から横書きで書かれており後代に貼られたものである。ただし、面積からすると、貼紙に記名されるような家老など上級家臣の屋敷地であることは確かであろう。陣屋の規模は、南北二五〇m・東西約一九〇mとなり、小谷図によれば総面積は三町三反歩に及ぶという。北・東・南の周囲には水路を利用して幅二間（一間は約一・八m）ほどの「外堀」を、家臣団屋敷には外堀に面して土塁を設けていた。

西国街道に通じる、かつ麻田藩領が広がる北側には大手門となる北門がある。北門は枳形の空間を備えた虎口を配置しているが、虎口内に通路の折れは無く防御性に欠ける^⑨。「麻田藩豊島郷大庄屋日記」寛延三年（一七五〇）八月七日条には、「今度御屋敷北御門前ニ訴詔箱出申候」とあるように^⑩、一八世紀半ばには門前に訴訟箱も設置されていた。一方、南門は小規模な作りで、虎口は設置されていない。

陣屋内には、北門と南門を結ぶ途中屈曲した南北道と、御殿北側に東西の道が通る。小谷図によれば、南北道は「巾三間道路」とあるが、東西道は巾四間で「馬駈場」となっていた。中村図によれば、馬駈場を「字西町」、南北道のうち屈曲部分より北側を「字東町」、それより南を「字南町」とし、陣屋内に街区を設けていた（実際の小字とは異なる）。

つぎに、陣屋の枢要部をみていこう。現とよなか起業・チャレンジセンター（旧市立蛭池公民館）の敷地に藩主御殿があった。市教委図によれば、御殿の他に庭園・会議所・玄関があった。また、小谷図には足輕控所・炊

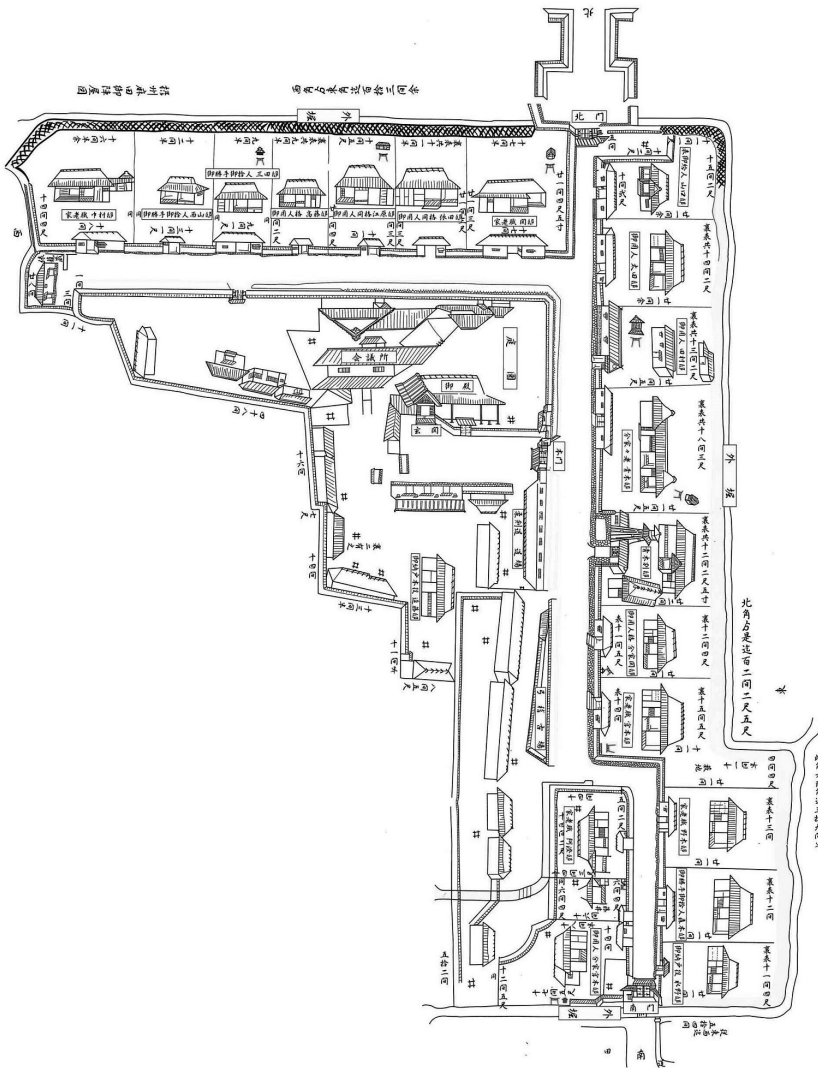


図3 「摂州麻田御陣屋図」トレース図
『摂津麻田藩図譜』より転載（資料提供 豊中市教育委員会）

事大床に加え、白洲や武具庫などが書かれている。市教委図では柔剣道場や本門、さらに南の区画には弓稽古場が描かれる。藩主御殿の北と東には、幅一間の「内堀」がめぐらされていた。市教委図・中村図・小谷図とも枢要部の空間を事細かに記しているのは興味深い。

家臣団の屋敷は、市教委図では二一戸ある。本門の南東正面は「青木別

邸」とあり、火の見櫓を設置している。小谷図では「御分家青木氏」とあるが、森本図には「旧知事私宅」「元知事住居」とあり、廃藩置県以前は藩主別邸だったと考えられる。一方、中村図には「役所」と書かれている。大庄屋日記には村役人が「御役所」に出仕する記録が多数あるが¹⁰、村役人が出仕する役所の機能を兼ねていたことも推測できる。

さて、市教委図と小谷図を比較すると、陣屋構造に変化を見て取れる。例えば、枢要部が縮小していたり、御殿西側の土塀のラインや北西端を拡張したりしていた。特に注目するのが、「臣家」と書かれる小規模屋敷地が大幅に増えていることである。中村図にも同様の区画がみえることから、幕末期にかけて増大していたことは確かであろう。家臣の人数に対応した措置と考えられる。また、発掘調査からは市教委図の野木邸は屋敷地境の溝が移動していた痕跡があることがわかる。

中村図には、屋敷地に「元〇〇旧拝借地、東京ヨリ引越ニ付返納」と書かれているが、明治維新後に江戸家臣が麻田へ帰還したことによる。屋敷には同じ家が一貫して居住し続けていたのではなく、居住者に変遷があったことが窺い知れる。「拝借地」とあることから、家臣にとって陣屋の屋敷は藩主から借りているという意識があったのだろう。

5 麻田陣屋跡の発掘調査

本節では、発掘成果から麻田陣屋の特色をみていく。

平成三〇年一〇月現在、麻田陣屋跡の発掘調査は一四次にわたって行われている。なかでも一九九三～二〇〇一年にかけて実施された七～一〇次調査は、大阪モノレール建設・蛍池駅の西地区再開発に伴う大規模調査となり、陣屋東側の家臣団屋敷地の大半が発掘された^①。ここでは、市教委図における北端の山口邸から森本邸までの九区画の遺構・外堀の一部・土塁の痕跡がほぼ陣屋図通りに検出されている。

家臣団屋敷地の調査成果で特に注目されるのが、出土した陶磁器である。

一七世紀の野々村仁清作のものが分家青木邸から発掘されたが、第二代藩主青木重兼が仁清と親交があり、贈与されたものだろう。また、田村邸からは一八世紀中頃の鍋島藩窯の磁器染付皿が出土した。鍋島焼は將軍家や諸大名への贈答品として用いられた高級品で、畿内における出土例は、公家屋敷・鍋島藩大坂屋敷・麻田陣屋の三例に限られる^②。

なぜ鍋島焼が麻田陣屋から出土したのか。入手ルートはいくつか想定できるが、青木氏と鍋島氏に交流があったのだろうか。例えば、文化六年（一八〇九）に、藩主鍋島総吉直禰が將軍に初お目見えする際、青木氏が世話役を勤めており、この時鍋島家臣が青木氏を訪れている（『雜記卯巳』など、森本家文書）。しかし、磁器染付皿の製作年代と時期差があるので、この時贈与されたものと断定できないが、それ以前にも同様な類例があった可能性もあるだろう。

さて、もう一つ注目するのが、三田焼系統の出土遺物である。三田焼は一八世紀後半に欽古堂亀助が始めたものであり、一九世紀には江戸でも流行した。唐物の写で、青磁や染付は贈答品として用いられた^③。発掘調

査では、磁器が溶着した匣鉢や焼く際に用いる足付ハマが出土しており、陣屋内部か近くに窯が存在したことが推測されている。青磁生産をする際には一〇～二〇mに及ぶ連房式登窯が用いられたが、今のところ陣屋周辺にて関連遺構は確認できていない。大坂市場を意識して、三田焼の生産を試みたのかもしれないが、それが成功したかは定かでない。

麻田藩は財政的に厳しい状況にあり郷請も行われた。その一方で、陶磁器は家臣の屋敷地から珍しい物が出土しており、切迫した財政状況は感じられない。赤松和佳氏の御教示によると、出土陶磁器は江戸の大名屋敷と比較すると劣るが、畿内の水準からすると高いものであるという。

6 おわりに

明治四年（一八七二）の廢藩置県により、藩主青木忠義は東京に移住した。陣屋は明治五年三月まで第二区会議所として使用され、同六年一月からは麻田小学校（豊島郡第二区第一番小学）として利用された。しかし、同一三年二月には建物の部分ごとにより払い募集がかけられ、麻田陣屋は解体された。その後、陣屋跡は田畑へと変貌した（『麻田村全図』）。

ところで、現在にも売却された麻田陣屋の建築物が伝わる。確認できるのが、①春日町の報恩寺にある麻田藩主邸表玄関（豊中市指定文化財）、②刀根山元町の麻田藩陣屋門（豊中市指定文化財）、③中桜塚の麻田陣屋長屋門、④蛍池中町の麻田陣屋切妻棧瓦葺き門、⑤池田市住吉の正光寺の切妻本瓦葺き門である。また、昭和三八年（一九六三）に御殿跡となる旧蛍池公民館の敷地約六七七㎡が市史跡指定され、昭和六二年に新条例による指定を受けた。市教委図の範囲が遺跡包蔵地に設定される。

麻田陣屋は、陣屋図と発掘調査から景観復元が可能な貴重な史跡であり、

当時の様相について多くの情報を提供してくれている。

註

- (1) 麻田藩については、中川すがね編著『摂津麻田藩図譜』（豊中市教育委員会、二〇一四年）に詳しい。
- (2) 豊中市史編纂委員会編『豊中市史』第二巻（豊中市、一九五九年）。
- (3) 麻田陣屋の発掘成果は、(財)大阪府文化財センター調査報告書第八一集『麻田藩陣屋跡』（二〇〇二年）による。
- (4) 前掲註(3) 報告書。市教委図の作成契機は不明だが、陣屋修理に伴う許可願の一環で作成された控とも考えられる。
- (5) 中村図は豊中市史編さん委員会編『新修豊中市史』第一巻通史一（豊中市、二〇〇九年）五六九頁に写真が、小谷図は『同』五七〇頁にトレース図が掲載されているので参照されたい。
- (6) 森本家文書（宝塚市立中央図書館所蔵写真）。原本の所在は不明である。「麻田陣屋図」と称する三点のうち、二点は区画配置から麻田陣屋と確定できる。
- (7) 上田一『摂津麻田陣屋』（日本古城友の会、一九八四年）。麻田陣屋周辺の小字は前掲註(5) 市史の付図「豊中市大字小字図」³⁾。
- (8) 御殿がある枢要部も西側は堀を設置せず、堀に折れを設けることで幾分防御性を高めている。この部分は麻田村集落とも接する。
- (9) 池田市『池田市史』⑨（大庄屋日記・住吉神社蔵）、一九九二年。豊中市教育委員会所蔵の大庄屋日記は、村田路人監修、清水喜美子・田村正孝翻刻校訂『麻田藩豊島郷大庄屋日記』、豊中市、二〇一七年）に翻刻されている。両冊を参照されたい。
- (10) 大庄屋日記には、「御屋敷」ともある。「麻田藩豊島郷大庄屋日記」元文四年

（二七三九）七月二六日条には、「殿様御上屋敷御普請出来、」とあり、麻田陣屋が上屋敷と認識されていた。

- (11) (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第二二集一『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛭池遺跡・蛭池南地区・蛭池西遺跡』（一九九七年）もある。蛭池遺跡も一部麻田陣屋の遺構と重複する（豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成二七年度、二〇一六年）。
- (12) 麻田陣屋出土の陶磁器については、前掲註(3) 報告書の他、赤松和佳「大阪・麻田藩陣屋跡出土の肥前陶磁」（『受容層の違いによる九州陶磁の様相』、九州近世陶磁学会、二〇〇四年）に詳しい。
- (13) 石神由貴「三田焼と欽古堂亀祐」（三田市教育委員会『三田焼に関する基礎調査・史料調査事業報告書』《本文編》、二〇〇四年）。岡佳子「北摂・丹波の磁器生産」（『東洋陶磁』四〇、二〇一一年）。

付記

報告にあたり、赤松和佳・岡佳子・川口宏海・清水喜美子・陣内高志・細川由貴の諸氏に御教示を頂いた。また、宝塚市立中央図書館市史資料室・豊中市教育委員会・豊中市文書館には、史料閲覧・利用に際しお世話になった。謝意を表したい。

（田村 正孝）

四 狭山陣屋

1 狭山北条氏の成立過程と陣屋着工

狭山陣屋は、大阪府大阪狭山市に所在した近世大名北条氏（以下「狭山北条氏」）の陣屋である。狭山に本拠を構えて二代続く狭山北条氏は、

関東の戦国大名北条氏（以下「小田原北条氏」）の末裔にあたる。

小田原北条氏は、秀吉への臣従を拒む四代氏政・五代氏直父子が天正八年（一五九〇）籠城戦の末、降伏して小田原城を開城する。秀吉の命により、氏政は自害、氏直は追放となる。氏直は、一族と家臣を率いて高野山高室院に蟄居し、赦免後の天正一九年八月、叔父氏規と豊臣氏旗本になるが、一月に大坂の北条氏屋敷（以下「大坂屋敷」）で病没する。小田原北条氏との連続を重視する狭山北条氏では、氏規を歴代外の「藩祖」、氏直養子で小田原第六代を約された氏盛を「初代」として扱う。

氏直の没後、遺領四千石を相続して豊臣氏旗本になるのが、天正一七年に氏直養子となった氏盛（氏規嫡男・氏直従弟）である。

氏盛は、文禄元年（一五九二）の「唐入り」の際、実父氏規とともに肥前名護屋（佐賀県唐津市）に駐屯する。ちなみに『日葡辞書』の記載「Gin'ya（ヂンヤ）戦争の時の幕舎、または、陣営内に作った仮屋」にしたがえば、狭山北条氏の最初の陣屋は、肥前名護屋の兵舎となる。氏盛は、慶長五年（一六〇〇）二月に実父氏規が没すると、四月にその遺領七千石も相続して一万一千石の大名に昇格し、九月の関ヶ原の戦いで東軍に属する。徳川氏と豊臣氏の相並ぶ「二重公儀体制」期をふくむ一七年間、北条氏当主を務め大名昇格をとげた初代氏盛は、片桐且元を介して豊臣大坂城の秀頼にも出仕し、慶長一三年に本拠の大坂屋敷で病没する。

二代氏信は、慶長二〇年五月の大坂夏の陣の後、將軍秀忠の許しを得て大坂へ戻る。氏信は、戦場になった大坂城下での屋敷再建を断念し、北条氏領地への本拠移転を志向する。

河内国丹南郡池尻村（大阪狭山市池尻）に、氏信は家臣たちと分宿する。氏信は、孫左衛門宅に仮住まいし、元和二年（一六一六）の末から、助左

衛門の田畑を予定地にし、狭山陣屋の構築を池尻村内で開始する。

狭山北条氏と南河内との関係は、大坂屋敷を本拠にしていた天正一九年、氏直が河内国丹南郡で丹上村・池尻村など、氏規が岩室村・今熊村をふくむ「^{（へき）}櫨村二千石」を領知したことに始まる。池尻村を本拠地に定めた背景の一つには、氏直旧領であった点も看過できない。

2 当初の狭山陣屋

当初の陣屋域は、狭山陣屋のうち上屋敷と呼ぶ北側ブロックの、さらにその北半分に相当し、石川旧流路の形成した河岸段丘の中段段丘上の西端にあたる（図4-1）^①。天王寺から南下する下^{しも}高野街道が、狭山池北堤で東へ向きを変え、摂津国平野と高野山を結ぶ中高野街道との合流地点にも近接した。東へ伸びる富田林・大和方面への道も通る交通の要地にあたる。東南の境界をなす東除川は、慶長一四年（一六〇九）竣工の片桐且元による狭山池改修で新設した東側洪水吐（東除）から新たに開削した水路である。

御殿と政庁は、陣屋域の最高所ではなく、中段段丘北寄りに突き出た舌端状地形の先端に位置し、地形から防御性を判断すると不審に思われる。しかし、近隣の池尻集落に家臣団が分宿し、集落中心部に居宅を構えた孫左衛門（池守田中家初代）の存在を考慮すれば、狭山北条氏が陣屋着工時に池尻集落と孫左衛門に依存していた状況が看取できよう。孫左衛門は、慶長二〇年の大坂の陣による豊臣大坂城の落城時、江戸出張で氏信留守中の大坂屋敷から氏信の生母法光院と弟二人を救出した功勞者であり、その居宅は帰国を許された氏信の仮住まい先になっていた。

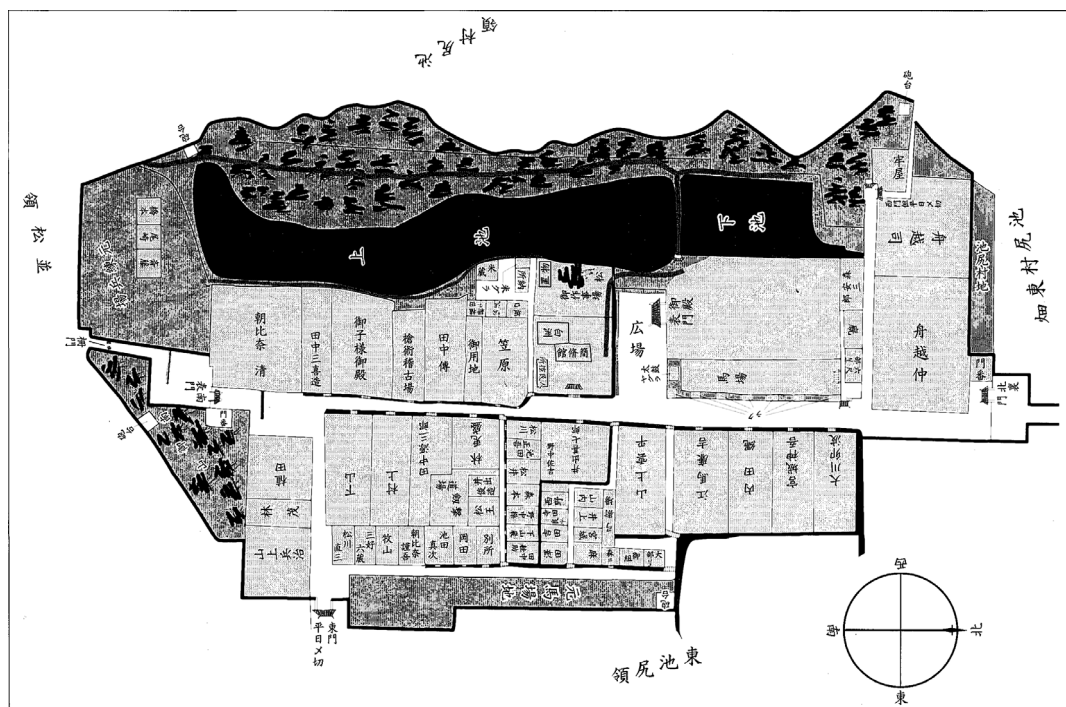


図4—1 「狭山藩陣屋上屋敷図」読取図

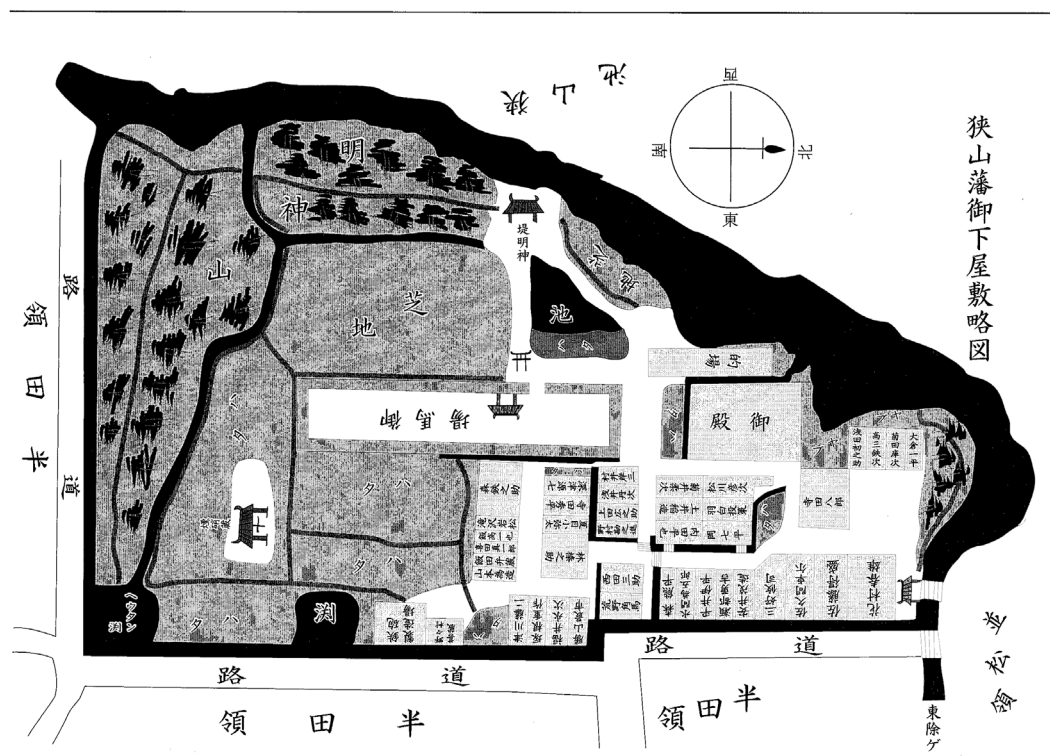


図4-2 「狭山藩陣屋下屋敷図」読取図

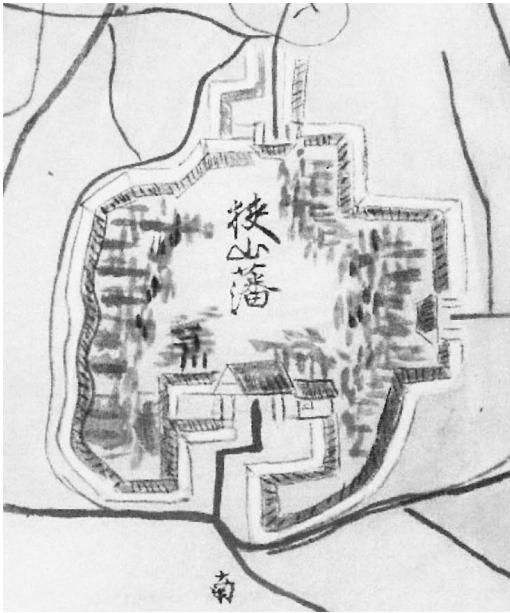


図4-4 「池尻村絵図」(上屋敷部分)



図4-3 「狭山池惣絵図」
(上屋敷・下屋敷部分)

3 狭山陣屋の整備過程

狭山陣屋は、画期によって五期に大別できる。第一期は、元和元年(一六一五)池尻村の西端集落(にじはた)の庄屋宅(孫左衛門宅)に二代氏信が仮住まいし、元和二年の暮れに助左衛門の田地を潰して陣屋構築を開始し、三代氏宗の寛永一四年(一六三七)に上屋敷の北半分が整う時期である。御殿と政庁からなる内郭、上級家臣の屋敷の整う最初期にあたる。

第二期は、寛永二〇年に上屋敷の南半分を整備し、寛文四年(一六六四)表長屋・北門を立て直し、寛文五年の御殿再建で上屋敷の全体が整う時期にあたる。

第三期は、四代氏治・五代氏朝による上屋敷再整備と下屋敷新設の時期にあたる。延宝五年(一六七七)氏治が半田村の字明神山(あき)に下屋敷を取り立て(図4-2)、貞享元年(一六八四)の東門焼失と元禄二年(一六八九)の上屋敷南端の大手門(長屋表門)再建を経て、五代氏朝が元禄一〇年に上屋敷御殿を再建し、元禄一一年下屋敷で御殿普請に着手する。下屋敷の御殿は、元禄一二年自邸の類焼した舟越左門への貸与をはさみ、元禄一五年に氏朝の隠居所となる。宝永三年(一七〇六)居間と茶立所、宝永四年裏の部屋、宝永六年下屋敷馬場、正徳三年(一七一一)次台所を整える。

第四期は、天明二年（一七八二）の大火の結果、大半が焼失した上屋敷と一部類焼した下屋敷の復興時期にあたる。天明六年御殿の再建を機に、上屋敷の復興が進むと推測できよう。

第五期は、砲台設置など防備面で強化する一九世紀で、幕末維新期から版籍奉還に至る最終形態の時期にあたる。

4 まとめにかえて

狭山陣屋を囲繞する外周は、一八世紀以前の各種「狭山池惣絵図」に竹矢来を描き（図4-3）、一九世紀以降の絵図や鳥瞰図をみると屋根瓦を載せた屈曲する練塀を描く（図4-4）^②。高い石垣を伴わない練塀は、内部直視や遠見遮断による防犯効果はあるが、外敵侵入を抑止する防御面での実効性には疑問が残る。

地名に注目すると、上屋敷南端の大手門付近に小字地名「枅形」がある。狭山陣屋に枅形と呼ぶ場所があったことは大筋で認められるが、絵図を確認するかぎり外敵侵入路の動線を直角に曲げておらず、中近世城郭の枅形の有した防御面での優位性は認めがたい。御殿は陣屋域の最高所になく、その点を根拠に「虚構の防御性」との評価も近年提起されている^③。

狭山陣屋の最終形態がうかがえる絵図（図4-1）によると、御殿を上屋敷の北端付近に配置しており、地形のみを判断材料にすれば確かに「防御性の放棄」にみえよう。しかし、社会的環境に着目すると、最初期の狭山陣屋が池尻村と孫左衛門への強い依存度を有し、その後の増改築の際にも池尻村と孫左衛門の存在を重視する空間構成を踏襲している。換言すれば、近世狭山池の管理総責任者となる池守田中家の初代孫左衛門と、陣屋膝下の北条氏領池尻村という存在が、高低差という地理的条件を凌駕し、

御殿の配置を規定し続けたと考えられる。

註

（1）図4-1・2は、『狭山池シンポジウム二〇一六 城郭から考える近世社会と技術―狭山池が生み出した新たな一面―』（大阪狭山市教育委員会、二〇一六年）二二頁・二三頁。

（2）図4-3・4は、『狭山藩北条氏―戦国大名 小田原北条五代の末裔―』（大阪狭山市教育委員会、二〇一六年）五一頁・六〇頁。

（3）千田嘉博「城郭の戦略的配置」（前掲註（1）文献）一八頁。（吉井 克信）

五 西代陣屋

1 位置

西代陣屋は河内国錦部郡西代村、現在の大阪府南東部の河内長野市の北部の段丘上に位置する。

陣屋は京と高野山を結ぶ高野街道の一つ、堺から延びる西高野街道に近接する。この街道は陣屋から南約七五〇mで八幡から延びる東高野街道と合流し、天見川谷を溯って紀見峠に至り紀伊国に通じる。また、陣屋から東に向かって行けば、石見川谷にそって大沢街道が通り、大沢峠、千早峠を越えれば大和国に至る。さらに西に向かえば順礼街道、和泉街道を通じて和泉国に至る。このことから、陣屋が三国に通じる街道の要衝に位置する事がわかる。

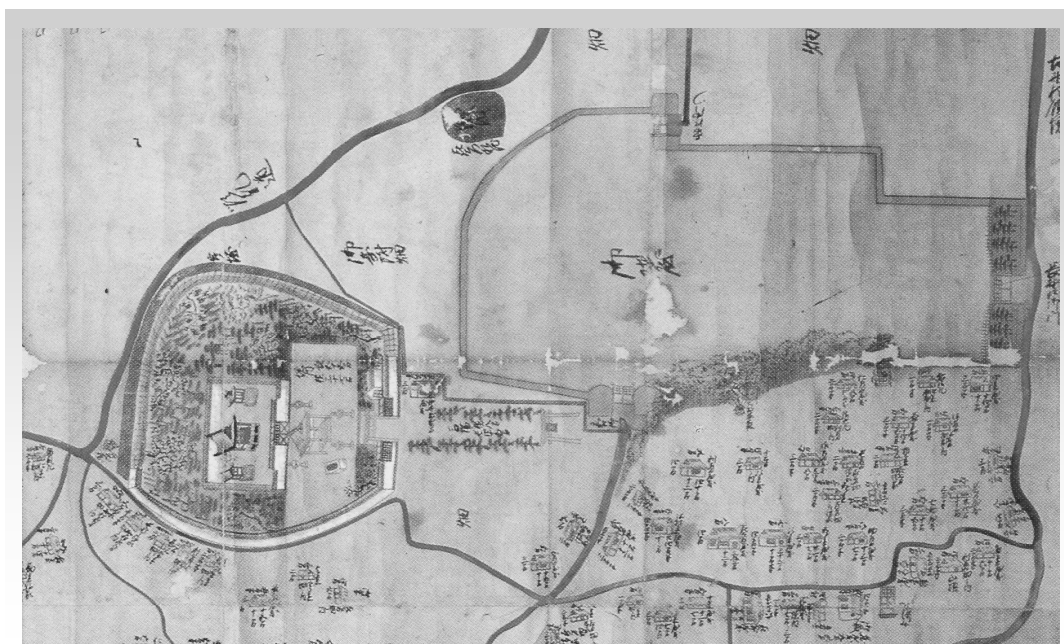


図5-1 西代村絵図（田中家所蔵）

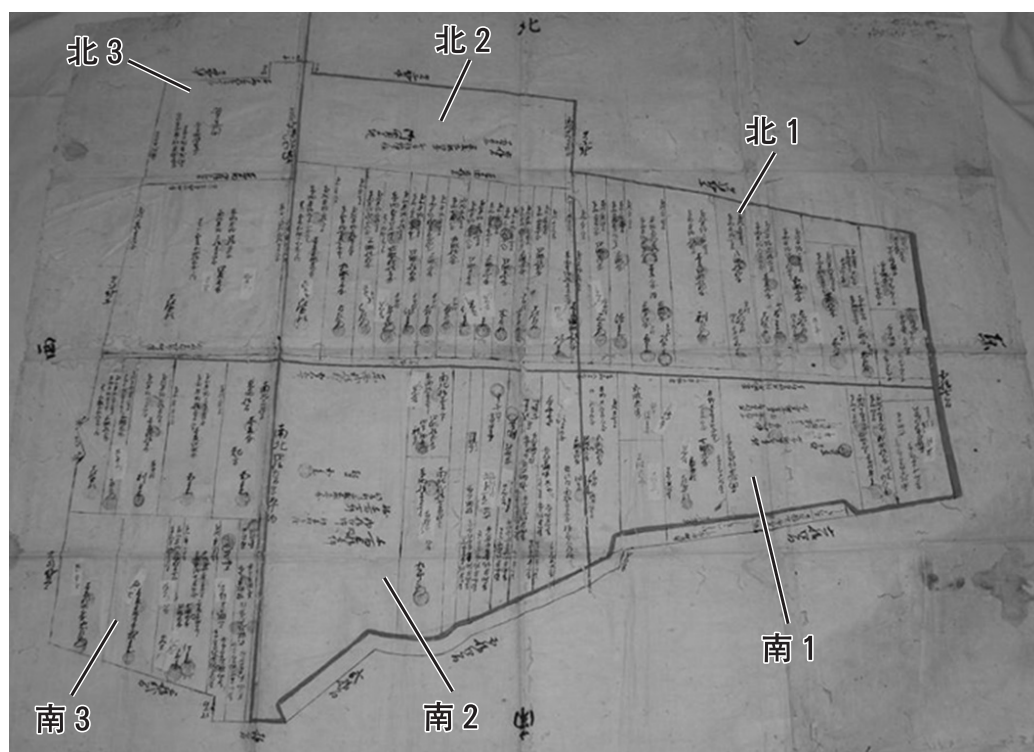


図5-2 御陣屋起帰り畑絵図（田中家所蔵）

2 開府に至る経緯

西代陣屋は、親藩である近江膳所本多家から分藩した河内西代本多家（後の伊勢神戸本多家）が開府したものである。

近江膳所本多家二代藩主を継ぐべき康長が早世し、後嗣の康慶が幼く、弟康将が藩主となった。康将は次の藩主に康慶に継がせるために、延宝七年（一六七九）に実子の忠恒に領地七万石から主に近江国高島郡・甲賀郡、河内国錦部郡内の一万石を与え分封させた。しかし、忠恒は典型的な番方の大名と言われ、領地である河内には入部しなかった。その子忠統になって正徳元年（一七一）西代に陣屋を築き領地経営を始めた。この忠統は將軍綱吉の小姓にはじまり、將軍吉宗の時代に頭角を表し、特に吉宗の信任厚く、享保改革では若年寄（財政担当）として中心的な役割を果たした。享保一七年（一七三二）には伊勢神戸に移封され、延享二年（一七四五）、吉宗隠居時には、その功績から五千石の加増をうけ待望の城持ち大名となった。

この西代開府から伊勢神戸移封までの約二十二年間、この地に陣屋が置かれた。

3 陣屋の規模、構造

（1）規模

南北一町二〇間（約一四五m）、東西二町五五間（三一七m）

往時の陣屋の全容は判明しない。ただ、陣屋撤去後に作製された左記の絵図が二枚残されており、それにより外郭を知ることができる。絵図は西代村の庄屋であった田中家に所蔵されているもので西代村絵図は現在市指定文化財である。



図5-3 西代藩陣屋跡周辺地形図（『西代藩陣屋跡』河内長野市教育委員会、2012年より）

図5―1 西代村絵図（田中家所蔵） 作製 享保一七年（一七三二）

絵図は伊勢神戸移封後の建物が撤去された陣屋跡地が描かれており、外郭の土塁や門の位地等がわかる。しかし郭内の建物は撤去された後と思われるので御殿や武家屋敷等の配置は不明である。

図5―2 御陣屋起掃り畑絵図（田中家所蔵） 作製 享保二〇年

絵図は陣屋撤去後の地割がえがかれ、一筆あたりの面積等が描かれている。その中で注目されるのが陣屋跡地の北側に「神戸地」とされる範囲があり、本多家が土地を所有していた。

(2) 立地地形

陣屋の標高は約一二二m、東側の石川に向かって伸びる台地上に位置する。南側は段丘崖となり西側で発した谷は北に廻りこみ深度を深めながら急峻な谷状を呈する。東側も南側に走る緩慢な谷状を呈する。

(3) 外郭の構造

外郭の構造は図5―1の絵図で知ることができる。

外郭を構成するのは土塁であったと考えられる。一部現存する土塁から底辺五m、高さ二m、上端二mの台形状を呈し、北側と東、西側、南側の一部にめぐらされている。ただ、南側は約七mの段丘崖のところは自然地形風に描かれていることから土塁は設けられなかった可能性もある。

そして北側では土塁が屈曲し横矢を意識したものとなっている。

出入口の門は三か所あり、東側に長野口御門、南側に宮口御門、北側に原口御門が配置されている。門は原口御門が喰違虎口の形式で配置されている。また長野口御門は他の門とは相違し取りつく土塁の描き方が異なり、樹木が描かれていることから規模が大きいものと考えられ、大手の可能性が高い。また、水路以外、堀等の描写はない。

郭内建物の配置等は不明であるが、図5―2の絵図から大まかな土地区割りがわかる。郭内中央を東西に道が走る。これは大手筋に当たると思われる。さらに宮口御門から原口御門に走る南北の道、更に北側土塁が屈曲し横矢となるところから南北に道が配置されている。これによって六区画の町割りがみられる。仮に北側を東から北1・北2・北3、南側を同じく東側から南1・南2・南3と仮称する。北1、北2の南側三分の二、そして南2の東側二分の一は一筆が縦長地割となっている。南1と南3も半折地割となったりして一筆が比較的大きい、南2の西側半分、南北2の北側三分の一が横長の一筆、北3が二筆となり地割は最も大きくなっている。特に北2と北3の北側は、絵図では「本多伊代守様御買土地」（小字名神戸地）と記載されていることから、陣屋の中枢部があった可能性がある。

この一筆の形状が、陣屋の敷地がある程度踏襲していると仮定すれば北2・北3・南2・南3が上級武士、御殿などの屋敷が配置され、北1、北2の南側、南2の東側が中、下級武士層の屋敷地が配置されていたと考えられる。

4 まとめ

当陣屋縄張りにおける防御機能は、北側に重点をおかれていることが明らかである。しかし、堀もなく喰違虎口や横矢的なものも見られるが防衛的には脆弱な構造である。

郭内の状況であるが、西代に陣屋が築かれる前であるが、延宝八年（一六八〇）の『本多家分限帳』によれば、家臣団は七〇家、内三〇〇石は三家、一〇〇石代が二家、五〇石が七家、後の一〇石前後が四九家、そして足軽四二人や中間達がいたことがわかる。これらが、陣屋内に屋敷地や長

屋を与えられていたと思われる。

享保一七年（一七三二）四月一日に転封を仰せつけられた後、御殿の一部は延命寺や当地の代官などに与えられた。家臣の屋敷や建物は幕府代官平岡彦兵衛に引き渡された。土地は元の所有者に返され、畑地に復旧された。陣屋がおかれた西代村だけは、藩領から幕府領にかわった。

現在は、陣屋跡と思われる敷地の三分の一は、小学校、中学校用地として使用されている。その小学校の正門が陣屋門を意識して建てられている。

（尾谷 雅彦）

六 伯太陣屋

1 伯太陣屋の立地と調査の経緯

伯太陣屋は信太山丘陵先端部の、主として南東から北西方向に向けて延びる、標高五〇メートル前後の微高地上に位置する。伯太町三丁目・四丁目にまたがり、最大時には周囲四キロメートル近く、一七町三段歩の広さを占めていた⁽¹⁾。陣屋の所在地とその周辺では、昭和三〇年代以降急激に宅地化が進んだこともあり、往時をしのべるものはほとんど残されていないが、市道や宅地区分との位置関係に、陣屋の区画が踏襲されている部分が見受けられる。

近隣では和泉市教育委員会による発掘調査が二〇〇四・二〇〇七・二〇〇八・二〇〇九・二〇一〇年度に、公益財団法人大阪府文化財センターによる発掘調査が二〇一三・二〇一四年度に行われた（図6-1）。そのうち、府道の敷設工事に先立って大阪府文化財センターが行った発掘調査では、調査面積が広範囲に及んでいたこともあり、陣屋の景観をより具体的に

に把握することができた⁽²⁾。ここではその調査成果でわかった、伯太陣

屋の様子を紹介したい。なお後述するように、陣屋は大規模な改修工事がなされ、その存立中に大きく変貌した。これまでの発掘調査範囲は大部分が改修後の陣屋にあたっている。改修前の陣屋は調査面積が限定的なこともあり、現在のところ具体的な状況は把握しにくい。したがって調査成果に基づく伯太陣屋の分析は、主に改修後の陣屋に対して行ったものである。

2 伯太陣屋の概要

渡辺丹後守吉綱が寛文元年（一六六一）に一万石の加増を受け、兄から受け継いだ武蔵国比企郡内などの三五〇〇余石とあわせて一万三五〇〇余石を知行し、大名に取り立てられ、初代藩主となった⁽³⁾。

元禄一年（一六九八）に武蔵国にあった知行地が近江国四郡に移され、領地がすべて畿内にまとまったことから藩の居所を和泉国大鳥郡大庭寺に移し、大庭寺藩となった。ただ、この段階での藩の本拠地は大坂の定番屋敷におかれていたため、大庭寺陣屋に実質的な陣屋の機能はなかったと考えられている⁽⁴⁾。齊藤絃子氏によると、伯太藩の家中は、一五〇石の御家老を筆頭に、物成高五〇石以上で要職を占める上級の士分、物成高五〇石に満たない実務的な職掌を務める「士分」、賄席・徒歩格などの「士分以下」からなる⁽⁵⁾。

享保一二年（一七二七）に、藩が提出した伯太村への陣屋移転の出願が幕府から許可され、伯太藩となる。大坂の定番屋敷は定番役を退くと退去しなければならなかったため、定番役の在任期間が残り少ないことを見越しての出願と考えられている⁽⁶⁾。大庭寺の陣屋に戻らなかった理由として、大庭寺陣屋が狭小だったことがあげられる⁽⁷⁾。

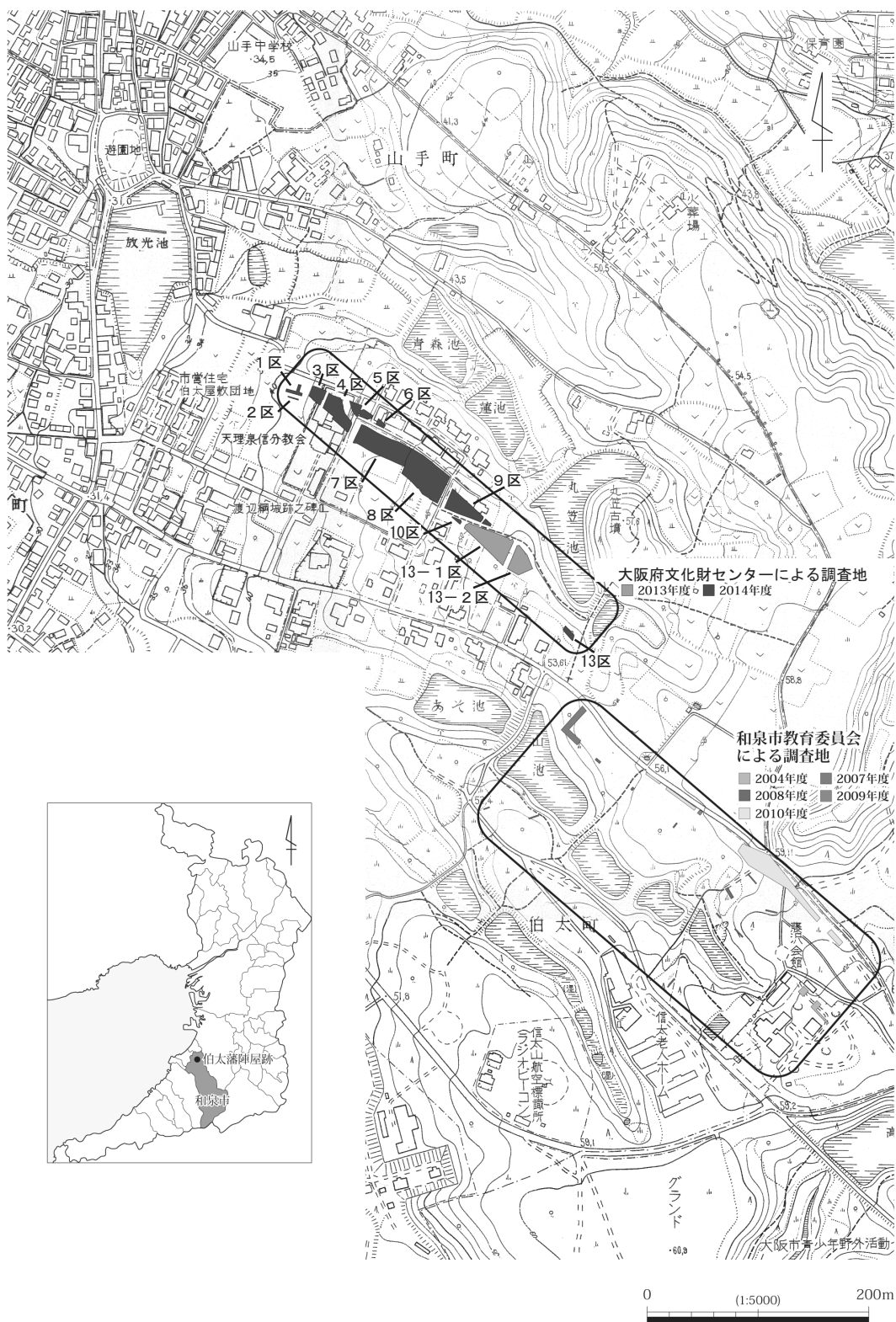
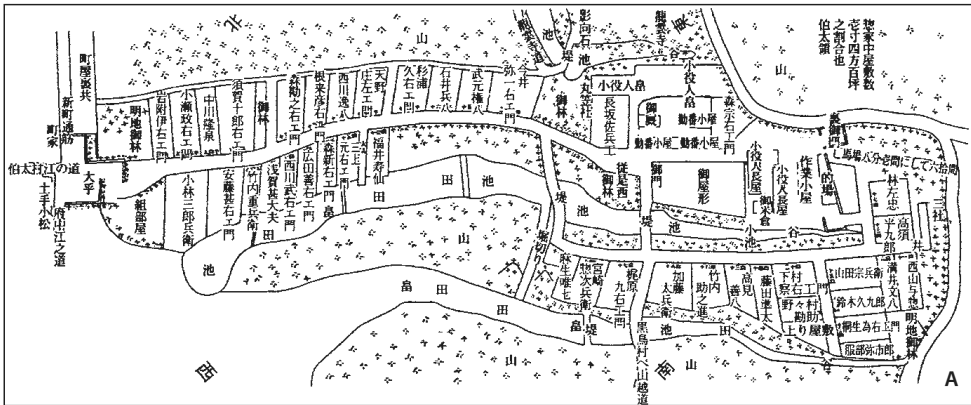
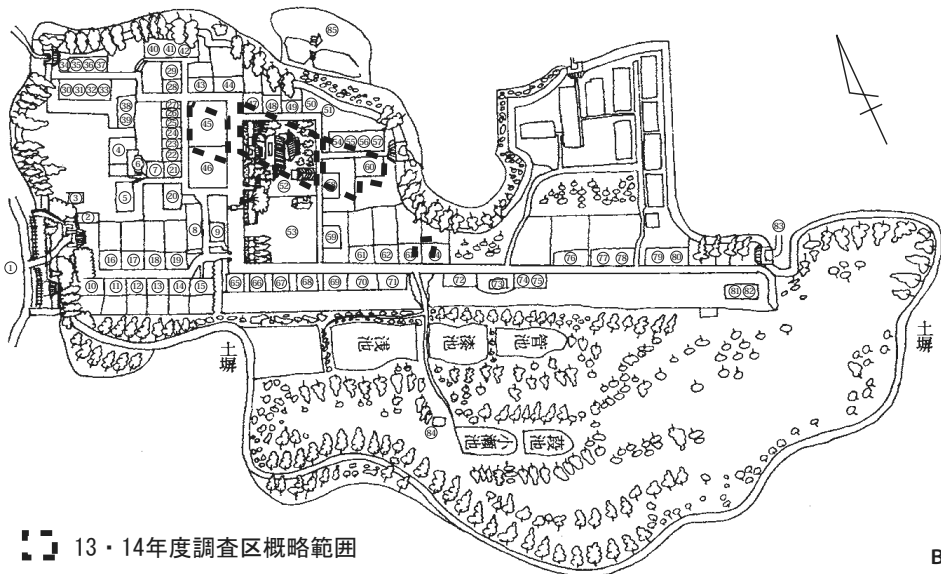


図6—1 調査地・調査区域地図



(和泉市史紀要第10集『松尾谷南部の調査研究』和泉市史編さん委員会2005より転載)



13・14年度調査区概略範囲

- | | | | | |
|----------|----------|--------|---------|--------|
| ①総御門 | ②西番所 | ③組部屋 | ④御作事 | ⑤馬屋 |
| ⑥中元(中間) | ⑦御蔵 | ⑧御馬屋 | ⑨御蔵 | ⑩民政所 |
| ⑪武元権八 | ⑫太田淳庵 | ⑬竹田祐之進 | ⑭竹内真平 | ⑮渡辺栄三郎 |
| ⑯岩附八角 | ⑰太田鉄男 | ⑱高見宗馬 | ⑲須賀真平 | ⑳向山雄助 |
| ㉑吉田定助 | ㉒山中善太 | ㉓和田泰庵 | ㉔田中田中 | ㉕浅井三治 |
| ㉖片山藤内 | ㉗西野又一 | ㉘小寺重内 | ㉙稲葉静右衛門 | ㉚沢内岩三郎 |
| ㉛坂田一平 | ㉜廣田晋治 | ㉝石井新之助 | ㉞足立文助 | ㉟鴨田順助 |
| ㊱岸田伴吾 | ㊲沢田新二 | ㊳井田由治 | ㊴田中乙二 | ㊵武元良助 |
| ㊶長坂要人 | ㊷〇〇廣吾 | ㊸佐竹勇三郎 | ㊹宮崎平内 | ㊺加藤直記 |
| ㊻長坂九郎右衛門 | ㊼森理左衛門 | ㊽岡安好 | ㊾中川菊馬 | ㊿丸谷柳助 |
| ㊿富原順助 | ㊿表御殿跡 | ㊿東御殿跡 | ㊿清水丞八 | ㊿小山勝治 |
| ㊿青木辰 | ㊿山中衆治 | ㊿杉浦寛吾 | ㊿下村彦六 | ㊿今井貫平 |
| ㊿鈴木一馬 | ㊿林橋夫 | ㊿山田謙良 | ㊿白鳥貞興 | ㊿西川殿治 |
| ㊿西川佐十郎 | ㊿野々村倫右衛門 | ㊿山田儀平太 | ㊿天野左衛門 | ㊿梶原平三 |
| ㊿坂尾治郎平 | ㊿麻生環 | ㊿畠地 | ㊿桐生為右衛門 | ㊿中川隆之助 |
| ㊿三上勇治 | ㊿柳井吾助 | ㊿井田与一 | ㊿鴨田積 | ㊿小山文治 |
| ㊿浅井幸治 | ㊿山中三喜 | ㊿東御門 | ㊿火薬庫 | ㊿御外庭 |

(本文註(6) 齊藤論文掲載図を再編・加筆のうえ転載)

図6-2 陣屋絵図

伯太村は、藩の領地に含まれる村の中では中規模の村高だが、村の東側を南北に通る小栗街道に近く、街道を挟んで東側には伯太山を所有していた。その伯太山には、古墳時代後期の群集墳が広範囲に形成されており、信太千塚古墳群として知られている。

ちなみに伯太陣屋の東側には、古墳時代前期末葉から中期初頭にかけての前方後円墳である丸笠山古墳が隣接している。今回の発掘調査でも二基の円墳を検出しており、うち一基は丸笠山古墳とほぼ同時期のものだった。周囲の古墳群と照合すると陣屋は、古墳時代前期末々中期初頭においても古墳が好んで作られた場所に位置していることがうかがえる。したがって陣屋造成時には少なくない数の古墳を壊す必要があったと考えられる。

陣屋の造成にあたっては、伐開以上の労力が必要だったにもかかわらず、あえてこの場所が選ばれていることから、街道に近いという点が、陣屋の立地条件の中でも、非常に重要な位置をしめていたことがうかがえる。

享保一三年に、藩主死去に伴い定番役を解かれる。定番屋敷から伯太村に移った当初は、庄屋青木甚左衛門の屋敷を仮陣屋としたとされる⁽⁸⁾。陣屋完成後は、藩主と家臣の一部がそこに居を構えた（本論では前期陣屋とする 図6-2A）。

明和七年（一七七〇）に陣屋の大規模な改修が行われ、家臣すべてが陣屋に居住する（本論では後期陣屋とする 図6-2B）。陣屋の改修に際して幕府に届けられた出願書には改修の理由として、当初の陣屋が周囲から古材等を集めて突貫工事で築造したものであったため、年数を経て著しく老朽化したこと、陣屋に居住できない家臣が周辺の村に長期間仮住まいを続けていることが、藩と村双方に大きな負担であることがあげられている⁽⁹⁾。その後は国替えもなく、伯太藩は明治二年（一八六九）の版籍奉

還を迎えた。ちなみに宝暦十一年（一七六一）における陣屋在家臣は八三人（家中の六割）、奉公人七九人である⁽¹⁰⁾。

明治四年七月、廃藩置県に伴い伯太県となり、藩主屋敷が政庁として使用される。伯太陣屋は「伯太在住」と改称される。この段階で士族が八七戸、一代士族七戸、卒五〇戸、合計一四四戸という⁽¹¹⁾。同年十一月、堺県に併合され、政庁としての機能も失効する。

『和泉伯太郷土史辞典』によると「明治六年五月一日堺県和泉国泉郡伯太村旧伯太藩政殿を借り受け仮校舎とし一校を親切することとなった。」とあり、それが伯太小学校の成立とされる。ただ仮校舎としての使用期間はわずか三ヶ月で、その後旧藩邸は完全にその機能を失った。明治十九年七月、旧藩士の転居が続き人口が減少したため、伯太在住は伯太村に統合される。この時点の戸数は伯太在住が一〇四戸、伯太村一七五戸だった⁽¹²⁾。

3 陣屋の変遷

現存する陣屋の絵図は三枚ある。①「泉州伯太藩陣屋之絵図」（大阪府立岸和田高等学校所蔵）（図6-2A）と②「和泉国仙北郡伯太亭陣屋跡」（図6-2B）、③「和泉国泉郡伯太元陣屋図面」（向山家文書）である。②と③は描かれている内容がほぼ等しく、②の方が家臣屋敷の配置や地割が具体的に書き込まれており、③は②を元に造られた陣屋の概略図と見られる。

②は明治になって解体される直前に描かれた、後期陣屋を記したものとみられる。対して①は、四代藩主登綱の代に描かれたとみられることから、前期陣屋の様子を窺うことのできる資料である。これらの絵図を仔細に眺



めると、表現方法は若干異なるものの、共通の道や地形的特徴が描かれていることがわかる。それらをもとに、陣屋の範囲を推定したのが図6―3である。図6―2と図6―3から前期陣屋と後期陣屋を比較すると次のことがわかる。

前期陣屋には陣屋を囲う施設がない。そのため丘陵に貫入する谷地形を外堀や内堀に見立て、それらに挟まれた場所を藩主の屋敷地とし、その周りに家臣の屋敷地を配して防御線としていた。陣屋内の空闲地は少なく、時間の経過とともに人が増えても、それに対応することができなかったとみられる。丘陵上に新たに造られた武家の村に、周囲から人が自由に出入りしたとは考えにくいものの、明確な区画施設を持たない景観は、そこに住む人たちにとってはストレスだったのではないだろうか。

後期陣屋は外周を土塀で完全に囲むことで、地形を防御施設にみたてて必要がなくなったためか、大手門に近く、眺望の開けた場所に藩主屋敷が移動する。また陣屋の面積も飛躍的に拡大し、すべての家臣の屋敷が、藩主屋敷を核に、周囲を取り囲むように配置された。絵図で「総御門」とされている表門と、「東御門」とされている裏門、それらを結ぶ大手筋に当たる道の位置関係は変わらないが、前期陣屋では裏門近くに配置されていた施設が、表門の方へ移されている。また表門の北側で、街道にすぐアクセスできるところに門が新設されている。大手筋から南方へ分岐する、前期陣屋では黒鳥村への主要な通路が、土塀で遮断されたため、「小瀬池」までで途切れている。土塀が、陣屋を周囲から遮断する機能を果たしたことがわかるが、土塀の外側に溝や堀切が作られた痕跡はなく、実質的な防御機能は低かったと考える。

4 発掘調査成果からわかったこと

発掘調査は後期陣屋の中央部分を長軸方向に平行するように、細長い範囲で行った。絵図と比較すると、7・8区は藩主の屋敷地の一部に、それ以外の調査区は家臣の屋敷地にあたることがわかる。調査対象となった家臣の屋敷は、4区において加藤直紀（御物頭格・一〇〇石）と長坂九朗右衛門（御家老・一五〇石）、5区において森理左衛門（御給人格・六〇石）、9区において清水丞八（下目付・金四両一人半）・小山勝次・青木辰（大流末席・金三両三分一人半）のいずれか、10区において杉浦寛吾（最古参の家柄で御物頭格）、13―1区において今井寛平（御近習・九〇石？）、13区において山田謙良（御近習格末席・七人扶持）・白鳥貞興のいずれかである。調査範囲は各屋敷地の一部分で、調査面積にも大小あるものの、藩主から七人扶持まで、あらゆる階層の屋敷が対象となっている。

藩主の屋敷地においては、屋敷内に配された東西もしくは南北方向の溝の位置関係から、建物のおよその配置を知ることができた。それらの溝は一九世紀の前葉に比較的大規模な改修工事を受けたのに加え、それから幕末にいたるまでの間にも繰り返し小規模な改修を受けていたことがわかった。一九世紀前葉に屋敷境や道ぎわに掘られた溝を改修した様子は、他の調査区でも認められたことから、後期陣屋が造成されておよそ半世紀を経た頃にも、比較的大規模な修繕が行われたことがわかった。それらの溝はすべての屋敷地境や道ぎわに配置されていたわけではなく、おそらくは排水を目的として、必要最低限設けられたものとみられる。したがって全体的には、屋敷地境は主に板塀等で区画されていたと考える。

家格や家禄に関係なく、ほぼすべての屋敷で井戸状の遺構を検出したが、それらはいずれも湧水点には達しておらず、水溜として使用されていたと

考えられる。陣屋が丘陵上に位置することから、井戸を掘るにはかなりの労力を要したと考えられ、飲料水を得るための井戸に関しては共用もされていたと考える。

次に出土品や遺構の状況から、家格や職階・家禄などの差がどのようなかがえるかを述べたい。つくばいや、手水鉢そばの排水施設とみられる遺構は、九〇石以上の上級家臣の屋敷でしか検出されなかった。特に藩主の屋敷のみで、坪庭とみられる場所に水琴窟がつくられていた。

出土遺物でみると製造者を示す刻印を付した瓦や、肥前系磁器のなかでも赤絵もしくは色絵と呼ばれるカラフルな食器は、九〇石以上の上級家臣の屋敷でしか検出されなかった。また小型の鳥を飼うのに使われた餌猪口は、藩主および家老と同等かも知しくはそれに次ぐ家格の家臣の屋敷でしか出土しなかった。飼育に手間がかかる驚等の野鳥を飼って、鳴き合わせを楽しむ遊びは、藩主とごく少数の家臣にのみゆるされたことだったと考えられる。

以上のことから九〇石以上の上級家臣と、十分および十分以下の家臣との間には、屋敷のしつらえや生活様式に明確な差があったことがうかがえた。ただ、茶わんや湯呑といった染付磁器や、すり鉢・土瓶・小型土鍋等日常使いの食器には、基本的にそれほど顕著な差を認めなかった。ちなみに出土した土器や家財道具の大半は、陣屋の最終段階に井戸状遺構や溝、ゴミ穴とみられる大型土坑に一括投棄されていたものである。廃藩置県後、陣屋から人口流出が進む過程で、転居する旧家臣が家財を処分した際のものともみられる。

陣屋の発掘調査では、江戸上屋敷の発掘調査で出土した、泡盛が入れられていた壺屋焼きの徳利、酒屋の屋号が付された通い徳利、紅小皿は出土

せず、会席で用いられるような大皿や重箱といった華やかな食器も非常に少なかった⁽¹³⁾。江戸屋敷では接待の席を設ける必要があったのに対し、国屋敷ではそのような必要性が低かったのかもしれない。かわりに藩全体で、できるだけ質素でつましい生活につとめていたことがうかがえる。

註

(1) 大越勝秋「泉州伯太陣屋村の研究」(『地理学評論』第三五卷九号、一九六二年)。

(2) 公益財団法人大阪府文化財センター編『伯太藩陣屋跡・信太千塚古墳』(二〇一五年)。

(3) 和泉市史編纂委員会編『和泉市史』第二卷(一九六五年)。

(4) 齊藤紘子「伯太藩による藩領支配の展開」(同『畿内譜代藩の陣屋と藩領社会』清文堂出版、二〇一八年)。

(5) 齊藤紘子「伯太藩の家中形成と大坂定番」(前掲註(4) 齊藤著書、初出二〇一七年)。

(6) 齊藤紘子「伯太陣屋と陣屋元村」(前掲註(4) 齊藤著書、初出二〇〇七年)。

(7) 前掲註(6)。

(8) 前掲註(3)。

(9) 前掲註(3)。

(10) 前掲註(5)。

(11) 前掲註(1)。

(12) 前掲註(1)。

(13) 帝都高速度交通営団地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会編『和泉伯太藩上屋敷跡』(一九九四年)。

討論要旨

(若林 幸子)

司会の馬部が講師紹介をしたのち、必要に応じて各報告の補足説明がなされ、討論に移った。以下、討論内容をまとめておく。

馬部 白木陣屋の場合、北側は防御が効いていますが、南側は集落と地続きで全周を防御する様子がありません。城ではないことを見た目でわかるようにこのような地形を選んだのだと思いますが、そのような事例は他にあるでしょうか。

中西 地黄陣屋の場合、東側は山から下りてきたところの斜面地形でして、少し無理をしたところに立地しています。近くでしたら戦国時代の丸山城があるので、このほうが丘陵上で使い勝手がよいはずですが、やはり、能勢街道に面したところに造りたかったから、このような結果になったのではないかと思います。問題は、東側をどうやって隔絶しようとしていたかですが、現状ではその痕跡は窺えません。ただし、一九八一年段階の図をみる限り土塁と堀があります。このように隔絶する意識はあるのですが、西側とは違い石垣までは用いていません。

田村 麻田陣屋は、北と東と南に外堀を巡らせていますが、西側にはありません。藩主御殿の北と東に内堀もありますが、幅は一間ほどです。外堀は二間ほどです。それほど大きい堀を巡らせていたわけではないです。東側には土塁がありますけれども、特段防御を固めているというわけではありません。北門の周囲には、石垣もしくは石積があったのではないかと考えられます。

吉井 狭山陣屋については、まんべんなく防御をするというのではなく、西側からの外敵以外はあまり想定していないように思います。上屋敷北側の御殿があるあ

たりが一番低くて南側のほうが高く、さらに下屋敷のほうが高くなっています。御殿が一番高いところになってよいのかと思ってしまいます。そう考えると、防御とは違う原則で陣屋の配置がなされていると考えざるを得ません。

尾谷 西代陣屋には、北側は喰違の原口御門があり、横矢を意識したラインがあります。さらにその北側には谷筋があり、西代神社に向けてその谷筋は南に曲がっています。このように北側から西側にかけては防衛する意識はあるようですが、東側に関しては長野口御門の土塁は大きいですが、地形的には浅い谷があるだけで防御性があるわけではないです。南側は段丘崖になっているので防衛ラインにはなっているのですが、絵図では藪として描かれており、地形にまかせるままで真剣に防御は考えていないようです。

若林 伯太陣屋の前期陣屋は、表門が虎口のように造ってあって唯一城郭の雰囲気があります。陣屋そのものは囲う施設がありません。溜池や谷を堀にみたてて藩主の屋敷を防御しているかのようにみせています。前期には城郭にはみえなかったものを、後期には城郭にみえるようにしていったという印象を持っています。それまで居住域でない山地に忽然と武家の集落ができると、近くの村の人たちはおいそれとは近付けないと思うのですが、住んでいる武家側にも心苦しいところがあったのではないのでしょうか。それを打開するために、陣屋の改築に向けて奔走したのではないかと考えています。

馬部 いずれの事例も、防御しているようで防衛しているとはいえないようです。吉井さんの言葉を借りるならば、防御とは別の原則が働いていたということになるかと思いますが、その点について何か見通しはあるのでしょうか。

吉井 例えば、中高野街道をわざわざ「くの字」に折り曲げて大手門の前を通らせるなど、流通や領地支配といった実務面でのメリットを意識しており、外敵が攻めてくるというのはあまり意識していないという意味で、別の原則と述べました。

馬部 これに関して、他の発表者に対して質問などある方はいますか。

尾谷 西代陣屋の場合、近くの町場というと三日市宿しかなく、周辺に町場が形成された形跡はないですが、他の陣屋の場合はどうなのでしょう。

馬部 白木陣屋には町場はないです。

中西 地黄陣屋の場合は、街道上に街村状のものが成立しています。そもそも能勢には町場がないので、陣屋に付随して町場が形成されたのだと思います。

田村 麻田陣屋も町場の併設は確認できません。おそらく、大坂や池田に近いというのも関係しているかと思います。

吉井 狭山陣屋の場合は小規模ながらミニチュアの城下町があります。そこには職人・米屋・宿屋などがみられ、遠方の領地から訴訟に來た人が滞在できるような宿泊施設を抱えていました。大きな買い物の場合は、堺まで出かけていたようです。

若林 伯太陣屋には、南北に伸びる小栗街道沿いに新町通筋と呼ばれる町場がありました。もともとは狭山陣屋のように宿屋があったところに、酒屋・米屋・職人などが集まってきたようで、家臣に宴席の場を提供するとか賭場として使うなという藩からの達しもみられます。新町自体は伯太村に包摂されていたようです。

馬部 今の問題と関わって、どこまでの範囲を陣屋と呼ぶかは大事なことだと思えます。例えば白木陣屋の場合、藩の施設がある部分だけ陣屋です。地黄陣屋の場合もそうです。それに対して、麻田陣屋については御殿があって、そのまわりにある家来の屋敷まで含めて陣屋町があります。狭山藩も同様だと思います。先ほどから問題になっている町場というのは、それらの陣屋町の外に展開する商工業者の居住地という意味です。陣屋町のなかに商工業者が展開するのではなく、儲かるから陣屋にくっついてくるわけです。西代陣屋も、あと一〇〇年続いていたら街道沿いに町場ができた可能性もあるのではないのでしょうか。大名陣屋はこの

ように括れるのではないかと思います。

尾谷 城下町的な規格をもった町場の形成は陣屋にはあるのでしょうか。

中西 大和盆地の南のほうでは、陣屋のまわりに町場を造っていきます。もともとある町場を利用するのではなく、浄土真宗の寺院を誘致して寺内町的な町場を造るという事例もあります。今日の皆さんの話を聞いていると、町場を造るという点では奈良と大阪では差があるのではないかと思います。田村さんもおっしゃっていましたように、近隣に町場があるからなのではないのでしょうか。逆にないから、地黄陣屋は町場を造ろうという意識が出てくるのではないかと思います。

吉井 時代は遡りますが、戦国時代の寺内では、例えば富田林や大ヶ塚は町場を形成します。ところが、大伴になるとあくまで農村でありながら寺内町並の権利を貰います。このように、町を志向する寺内とそうではなく権利だけ貰えばいいという寺内もあるのです。陣屋も武士の集住地があれば、需要と供給の関係で商人たちが集まってきて町場が自然とできると思いますが、それを志向しない町場ができないような陣屋があってもしかるべきだと思います。

中西 城郭の平面構造を考えると、ここが軍事的だとか、そういう説明をよくします。それに対して、周辺の学問領域の方から本当にそうなのかと疑問を持たれることもよくあります。そういうこともあって、本当に軍事性を持っているのか否かというのは非常に線引きが難しいんです。例えば、堀があったら軍事だけが目的かというとそうではなくて、中に宗教施設があれば結果という役割もありますし、何らかの特権を有するような町場があればここは通常の村落とは違うのだということを区画して明示するという機能も考えなくてはいいかもしれません。皆さんもわかったうえで話しているのだと思いますが、陣屋も本当に軍事だけで解釈していいのか怪しいと思っています。例えば、池があるからこの方向からの敵に備えているのだと想定していますが、本当にそうなのか考え直す必要があると感

じています。いずれの大名陣屋もそうなのですが、藩主の御殿を囲いきっていないので、ここに城郭でいうところの本丸の機能があるかという点と怪しいです。むしろ、まわりとの隔絶を図っているのは家臣団の屋敷地です。城郭でいうところの二の丸だけを囲っているという意識なのかと思います。二の丸のなかに藩主が住んでいて、本丸がないというイメージです。では、二の丸だけで城が持つかという点とよくわかりません。そう考えると、囲うということにまず意識があるのではないかと思います。村落とは違う武家身分が集住しているという意味です。まさに陣です。そうすると防御性が弱いという問題も、そもそもその発想はなく、二の丸さえ囲んでいけばよいという発想かと考えられます。そのへんで皆さんの率直なコメントをいただきたいです。

吉井 狭山陣屋の上屋敷の場合は、藩主が居住する場所と政庁を蔵を並べて囲った、土塀で区画したりしていますが、外からみて囲っていることがわかる程度で、防御機能があるかどうかは疑問です。

尾谷 西代陣屋は建物配置がわかりませんが、本多家が買い上げた神戸地という区画が北側の喰違虎口のところにあります。ここから、敵から攻められるところに御殿を造るのかという疑問も出てきます。土塁もありますが高さが2m程度なので、本当に防御機能があるのか疑問です。武家が住むところは一応防御してまずという程度のような感じもします。

若林 伯太陣屋も、後期になると陣屋のまわりを土塁で囲みますが、発掘で基礎が出ていて、せいぜい2〜3mくらいの高さだろうと推測されています。その気になれば越えられるものです。藩主の屋敷ではなく武家屋敷地を囲むという中西さんの発想は、納得できるご意見です。

田村 麻田陣屋は、御殿は塀や折れがある程度で工夫は特段ありません。そういう意味で、区画が目的というのは納得しますし、そのなかで防御の形を一応造って

いるというのはあると思います。

中西 ご意見ありがとうございます。何でも軍事に収斂させるのは問題ですが、いずれの陣屋にも折れがみられるように、一面では軍事性を保とうとしているところもあるので、白か黒かと割り切るのもどうかと思います。ただ、城郭史の視点から申しますと、虎口部分に側射をかけるのが折れ本来の効果的な使い方ですから、地黄陣屋以外下手くそだと思いついておりました。

馬部 武家地をはっきりさせるということは、もう少しいつと江戸時代の身分制と対応させるということかと思っています。土農工商という職業で分ける身分制は実ではなくて、居住地で身分が分けられていたというのが最近の議論かと思っています。武家地に住んでいたら武家、町に住んでいたら町人、町以外だったら百姓ということです。それを踏まえると、ここから先に住むのは武家だというのを目でみてわかるようにするもので、防御よりもむしろ身分の境界をはっきりさせる目的があるのではないかとお話を聞いていて思いました。他に質問のある方はいますか。

若林 陣屋の成立時期と構造の関わりがどうなっているのかが気になっています。宝暦一二年に緩やかながら陣屋の規定ができるという馬部さんの話がありました。伯太陣屋の前期と後期の違いを考えるうえでも、幕府の規定が影響する部分はどれくらいあったのか知りたいです。

中西 例えば、元和年間に修築された園部陣屋の小出氏は、当初は大庄屋のところに寄宿しながら修築し、仮陣屋も造っています。仮陣屋は折れも多用した土造りです。そのうち園部陣屋を構えます。後年、幕府に城主格にしてほしいと主張しているときには、当時の老中から堀を浚うなという指示が出るなど規制がかかっています。永井氏の神足館なども堀の浚えは無用などと言われているので、軍事的なことはあまりしてはいけないという足枷があったようです。一八世紀になって陣屋の規定ができたのは、各地の大名家が分家などして思っていた以上に陣屋

ができたから、それに対応して後追いで法を定める必要が出てきたためかと思えます。それと関連して、譜代大名は転封が多いのでその居城は將軍家のものという位置付けになっていて、外様大名とは少し違うと思うのですが、陣屋はいったい誰のものなのでしょう。

馬部 陣屋が誰のものかすぐ答えは出てこないのですが、織田・豊臣の時期を経るなかで城とはトップにいる人物のもの、徳川の時代になると幕府のものであるという感覚がだんだん浸透していきます。だから転封が可能になります。譜代大名に限らず外様大名も鉢植えで据え変えられるようになるわけです。城は大名のものではなく、幕府のものという意識が浸透したからでしょう。それに対して陣屋は誰のものかという問題ですが、西代陣屋の事例が参考になるのではないのでしょうか。大名が転封したら次の大名が入ってくるというのが城の世界の原則ですが、西代陣屋は転封したらなくなってしまうのです。この点、尾谷さんはどうお考えですか。

尾谷 西代陣屋の場合は、本多氏が移封になると幕府領になります。本多氏も神戸に行って城を持つというのは、望みだったと思います。ですから、幕府も陣屋は仮住まい的な発想で捉えていたのではないかと思います。大名もやはり正式な政庁は城という意識があるのではないのでしょうか。

馬部 陣屋とは仮住まいという話がありましたが、たしかに戦国時代の文献では、戦時に臨時で設けるものという意味で用いられています。その感覚は江戸時代にも脈々と続いていて、現実には江戸初期に造られて幕末まで存続していても、陣屋とはあくまでも仮のものだという意識が通底しているように感じました。

田村 麻田陣屋の武家屋敷は一貫して住み続けている事例が少ないです。絵図では拝借地と記されています。家臣から見ると、当主の物という意識があったのではないかと思います。

馬部 たしかに城下町でも家臣の屋敷は拝領屋敷といいます。陣屋のまわりにある武家集住地は、城下町でいうそれに相当するという感覚なのでしょう。私からもう一つ質問があるのですが、伯太陣屋の大手入ってすぐ右側にある喰違状のものは何でできているのでしょうか。

若林 よくわかりませんが、山の部分と同じような表現です。

馬部 低めの土塁みたいにみえますね。今日もそれぞれの報告者が枡形という表現を用いていましたが、枡形とは方形部分のなかに入って、そこでいったん直角に曲がって城内に入っていくというのが基本的な考え方だと思います。伯太陣屋の大手もクランクして真っ直ぐ入れないようになっていますが、小さい土塁もどきのようなものを取り除くと、結局平入りですね。麻田陣屋の北側虎口も枡形と呼ばれていますが、軍事的にみると平入りで曲がっていないです。狭山陣屋でも上屋敷の南の門は地元では枡形と呼ばれていますが、伯太陣屋同様の土塁もどきのようなものを除くと実質平入りですね。北側の門もそうです。城郭研究でいうところの枡形は、厳密には地黄陣屋のみなんです。西代陣屋の原口御門も北から来たら喰違になっていますが、東側から入れば平入りです。そう考えると、陣屋の虎口はことごとく平入りだということに気付かれます。でも、平入りだけでも、枡形っぽくわざわざ空間を造るわけです。こういうところが防衛よりも儀礼に重きをおいているというか、先ほどから話に出ている、ここから先が武家地だという身分制の問題で捉えるべき問題のような気がします。

吉井 小字の地名で枡形と呼んでいるので、少なくとも武士のなかではそう呼ばれていて、枡形の構造は正規にはとっていないけれども、枡形と呼びたい構造物だったという意識があったのではないのでしょうか。

馬部 防御施設と思っていたものが、それっばいだけで、実はその機能がなかったことが今日の議論のなかでわかってきた気がします。困うという話に戻りますが、

ここから先は武家地であるという問題だけでなく、中西さんが指摘されていた陣屋は単郭という問題も重要だと思います。二重になった時点で防御を意識した城と判断されていたのではないのでしょうか。それに加えて、折れていない枳形をつくることで、これは城ではないですとアピールしていたように事例を並べてみるとみえてきました。

中西 やはり堀が防御のためのものかどうかというのを突き詰めて考えていく必要があるように思います。例えば、多田院御家人の家は前に堀があって、裏にはないんです。多田院御家人ということを目にみえて示す意味が堀にはあるのではないかと思います。家のまわりを囲っている堀は軍事的な視点だけでなく、身分を示すものという観点からもみなくてはいけないのではないのでしょうか。しかも、そのような屋敷地があるところとないところがあるので、地域的な身分の特性とも関わるといわれています。藩主御殿の大手筋に面した部分だけ囲うというのも、他の家臣団屋敷地とは違う人が住んでいるというのを示すという役割もあるように感じました。

馬部 ここまでの討論で、小さい大名でも、試行錯誤を重ねながら支配のために武家地をみせる工夫をしていたことがわかってきたかと思います。時間がなくて触れることができませんでしたが、狭山陣屋や伯太陣屋のように、前期と後期で大きな改変があるというのも大事な点です。城郭では、江戸中期以降に倍に拡大するなどありません。それに伴って規定も必要になってくるのだと思いますが、こうした動きからいえるのは、支配を進めるなかでの試行錯誤の末にできたのが陣屋ということです。そういう意味では、江戸時代の支配のありかたを表象する施設ということで見直していく必要があります。麻田陣屋や狭山陣屋は市指定文化財になるなど保存の努力がみられますが、それ以外は未指定です。地黄陣屋と白木陣屋の石垣は、写真をみただけでも立派だと驚いた方も多いのではないでしょ

うか。皆さんからも、これらの魅力を広めていただけたらと思います。本日はありがとうございました。